

## 鴻仰宗の盛衰(三)

### 目次

- 一 はじめに
- 二 仰山慧寂
- 三 仰山西塔光穆
  - (1) 正聞とは何か
  - (2) 祖意と教意の同異
  - (3) お前に仏性無し
  - (4) 頓と漸とは何か
- 四 晋州霍山景通
  - (1) 大禪仏の景通
  - (2) なぜ俗人を礼拝するか
  - (3) 坐具を提起した僧
  - (4) 師資共に打つ
  - (5) 火炎の中での示寂

(以上一八・一九号)

### 石井修道

- 五 杭州文喜
  - (1) 唐杭州龍泉院文喜傳
  - (2) 無著文喜禪師伝
  - (3) 仰山慧寂に參ず
  - (4) 仁王院・龍泉院に住す
  - (5) 涅槃の相とは何か
  - (6) 仏法の大意とは何か
  - (7) 自己とは何か
  - (8) 晩年の行状
- 六 五冠山順之
  - (1) 五冠山瑞雲寺の開創
  - (2) 四対八相
  - (3) 兩対四相
  - (4) 四対五相

(5)

三遍成仏

(6)

三篇証実際

(7)

遷化・證号

### 三 仰山西塔光穆

#### (1) 正聞とは何か (『景德伝燈錄』卷一二)

仰山西塔光穆禪師。世住第二。僧問、如何是正聞。師曰、不從耳入。曰、作麼生。師曰、還聞麼。

#### (2) 祖意と教意の同異

問、祖意与教意同別。師曰、同別且置、汝道、餅觜裏什麼物出来入去。

#### (3) お前に仏性無し

問、如何是西來意。師曰、汝無仏性。

問う、「祖意と教意と同か別か」。師曰く、「同別は且く置く、汝道え、餅觜裏より什麼物か出で来たり入り去る」。

#### (4) 頓と漸とは何か

問、如何是頓。師作円相示之。曰、如何是漸。師以手空中撥三下。

問う、「如何なるか是れ頓」。師、円相を作りて<sup>(3)</sup>之を示す。曰く、「如何なるか是れ漸」。師、手を以て空中に撥<sup>はら</sup>うこと三

— 下す。

(1) 仰山西塔光穆禪師 = 慧寂の跡を継いで仰山第二世となつたと伝えるが、行状は不詳。なお、『景德伝燈錄』は、前二回は四部叢刊本

を底本に使用したが、今度より同じ宋版として東寺の東禅寺版の影印を禪文化研究所より挙受したので、底本としては東禅寺版の方が優れているから、これを使用し、四部叢刊本は参考にとどめることにした。略号として、前者を(東)、後者を(四)とす。

(2) 仏性無し = 仰山慧寂の(84)項参照。

(3) 円相を作りて = 同注(29)参照。

#### 四 晋州霍山景通

##### (1) 大禪仏の景通(『景德伝燈錄』卷一二)

晋州霍山景通禪師。初参仰山。仰山閉目坐。師曰、如是如是。西天二十八祖亦如是、中華六祖亦如是、和尚亦如是、景通亦如是。語訖向右辺翹一足而立。仰山起来打四藤杖。師因此自称集雲峰下四藤條、天下大禪仏。帰宗下亦有大禪仏、名智通、終於五台。

晋州霍山景通禪師<sup>(1)</sup>。初め仰山に参ず。仰山目を閉じて坐す。師曰く、「如是如是。西天二十八祖も亦た如是。中華の六祖も亦た如是。和尚も亦た如是。景通も亦た如是」。語り訖りて、右辺に向て一足を翹げて立つ。仰山起ち来たりて打つこと四藤杖す。師此に因りて自ら集雲峰下の四藤條、天下の大禪仏と称す。帰宗の下に亦た大禪仏有り、智通<sup>(2)</sup>と名づく。五台に終る。

##### (2) なぜ俗人を礼拝するか

後住霍山。有行者問、如何是仏法大意。師乃礼拜。行者曰、和尚為什麼禮俗人。師曰、汝不見道、尊重弟子。

後に霍山に住す。行者有りて問う、「如何なるか是れ仏法の大意」。師乃ち礼拝す。行者曰く、「和尚、什麼と為てか俗

一人を礼す」。師曰く、「汝、弟子を尊重するを見道ずや」。

### (3) 坐具を提起した僧

師問僧、什麼処來。僧提起坐具。師云、龍頭蛇尾。

師、僧に問う、「什麼の處より來たる」。僧、坐具を提起す。師云く、「龍頭蛇尾」。

### (4) 師資共に打つ

僧問、如何是仏。師打之。僧亦打師。師曰、汝打我有道理、我打汝無道理。僧無對。師乃打趁。

僧問う、「如何なるか是れ仏」。師、之を打つ。僧も亦た師を打つ。師曰く、「汝が我を打つは道理有り。我が汝を打つは道理無し」。僧対えること無し。師乃ち打ち趁<sup>おひはらう</sup>う。

### (5) 火炎の中での示寂

師化縁將畢、先備薪於郊野、徧辭檀信。食訖行至薪所、謂弟子曰、日午當來報。至日午、師自執燭、登積薪上、以笠置頂、後作円光相、手執拄杖、作降魔杵勢、立終於紅燄中。

師、化縁將に畢<sup>まき</sup>らんとして、先づ薪を郊野に備え、徧く檀信に辞す。食し訖りて、行きて薪の所に至り、弟子に謂いて曰く、「日午に当に来りて報<sup>おわ</sup>すべし」。日午に至りて、師自ら燭を執り、薪を積みし上に登りて、笠を以て頂に置き、後に円光の相を作り、手に拄杖を執りて降魔杵<sup>よ</sup>の勢を作し、立ちながら紅燄の中に終る。

### (6) 霍山和尚に參ず（『景德伝燈錄』卷一の霍山章）

晋州霍山和尚。仰山一僧到。自称集雲峰下四藤條天下大禪<sup>(3)</sup>仏

——晋州霍山和尚。仰山の一僧到る。自ら集雲峰下の四藤條、

参。師乃喚維那打鍾著。大禪仏驟歩而去。

天下の大禪仏と称して参ず。師乃ち維那を喚ぶ、「鍾を打(4)て」。大禪仏、驟歩り去る。

(1) 晋州霍山景通禪師=伝不詳。晋州霍山は、天柱山あるいは衡山ともいう霍山が安徽省廬州府六安州西南九〇里にある(『大明一統志』卷一四)が、天柱山のある安慶府が梁代に晋州と呼ばれたとしても、ここは唐代に晋州と呼ばれた山西省平陽府霍州東南三〇里にある霍山をさす(『大明一統志』卷二〇)。鴻山靈祐の法嗣に晋州霍山がいるので、景通はその後席を継いだのである。

(2) 智通=帰宗智常の法嗣の五台山法華寺智通のこと。『景德伝燈錄』卷一〇に機縁の語がある。

(3) 晋州霍山和尚=鴻山靈祐の法嗣として、『景德伝燈錄』卷一一に二則の語を載せる。後に取り上げる。

(4) 鍾を打て=著は句末にあつては、命令をあらわす。ここでは訓読はしない。(四)ハ「打鐘著」ヲ「般柴著」ニ作ル。

## 五 杭州文喜

### (1) 唐杭州龍泉院文喜伝(『宋高僧伝』卷一二)

①釈文喜、姓朱氏、嘉禾禦兒人也。母氏方娠夢、吞桃三蒂。至誕弥、不味葷羶。七歳、詣本邑常樂寺僧清國下、出家。国即喜之渭陽也。勒誦經并懺文十卷、方遂削染。往越州開元寺、學法華經、集天台文句、即時敷演。則救蠱分中、便能講訓也。開成二年、屆趙郡受近円、登習四分律。屬会昌澄汰、變素服、內祕之心無改。遇大中初年例重懺度。於鹽官齊豐寺講說。

釈文喜、姓は朱氏、嘉禾の禦兒の人なり。母氏方に娠みて夢むらく、桃三蒂を呑む、と。誕るるの弥<sup>(2)</sup>きに至りて葷羶を味わはず。七歳にして、本邑の常樂寺の僧清國<sup>(2)</sup>の下に詣り出家す。国は即ち喜の渭陽なり。勒して經并びに『懺文』十卷を誦し、方めて削染を遂ぐ。越州開元寺<sup>(3)</sup>に往き、『法華經』を学び、『天台文句』を集めて、即時に敷演す。則ち救蠱<sup>(3)</sup>の分中、便ち能く講訓せり。開成二年(八三七)、趙郡<sup>(4)</sup>に届り、近円を受け、登に四分律を習う。会昌の澄汰に属し、素服に変するも、内秘の心は改むる無し。大中初年(八四

七)に例によつて重ねて懺度するに遇う。塩官の斎豊寺<sup>(5)</sup>に於て講説す。

②後往礼大慈山性空禪師。誨之曰、子何不学善財遍參乎。咸通壬午歲、至予章觀音院、見仰山。喜於言下、了其心契。仰山令典常住。一日、有異貌僧、就求齋食。喜減己食饋之。仰山預知。故問曰、此果位僧求食。汝供給周旋否。答曰、輶己分迴施。曰、汝大得利益。

〔子、何ぞ善財の遍參を学ばざるや〕。咸通壬午の歲(八六二)、予章の觀音院に至り、仰山に見ゆ<sup>(7)</sup>。喜、言下に於て其の心契を了る。仰山は常住を典らしむ。一日、異貌の僧有り、就いて齋食を求む。喜は己が食を減じて之に饋む。仰山は預<sup>(あらか)</sup>じめ知る。故に問うて曰く、「此れ果位の僧、食を求む。汝、供給周旋するや」。答えて曰く、「己が分を輶<sup>(すす)</sup>めて施を回らす」。曰く、「汝、大いに利益を得ん」。

③七年、旋浙右、止千頃山、築室居之。十年、余杭劉嚴合馬、徵請居龍泉古城院、凡十一年。乾符己亥歲、巢寇掠地、至余杭。喜避地湖州余不亭。刺史杜孺休、請住仁王院。光啓三年、武肅王錢氏、始牧杭郡、降疏請住龍泉解署。今慈光院是也。

七年(八六六)、浙右に旋り、千頃山<sup>(8)</sup>に止まり、室を築きて之に居す。十年(八六九)、余杭の劉嚴<sup>(9)</sup>合馬、徵請して、龍泉古城院<sup>(10)</sup>に居すこと凡そ十一年なり。乾符己亥の歲(八七九)、巢寇地を掠<sup>(かす)</sup>めて余杭に至る。喜は地を湖州の余不亭<sup>(11)</sup>に避く。刺史杜孺休<sup>(12)</sup>は請して仁王院に住せしむ。光啓三年(八八七)、武肅王錢氏、始めて杭郡を牧<sup>(おき)</sup><sup>(14)</sup>め、疏を降し、請して龍泉の解署に住せしむ。今の慈光院<sup>(15)</sup>、是れなり。

④大順元年、威勝軍節使董昌、武肅王、同年發表薦論、両賜紫衣。乾寧四年、奏師号、曰無著。光化三年、示疾。十月二十七日、加趺坐而終于州郭解署。春秋八十、僧夏六十。終時方丈上發白色光、竹樹變白。十一月二十二日、遷塔于靈隱山

西塙。

六十なり。終る時、方丈の上に白色の光を發し、竹樹白に変ず。十一月二十二日、塔を靈隱山の西塙に遷す<sup>(18)</sup>。

⑤喜形貌古朴、骨強而瘦。戒德禪門、真知識也。

喜は形貌古朴にして、骨強くして瘦す。戒德、禪門の眞の知識なり。

⑥初喜寓居雪川。広明元年夏、有蝗飛翳天、下食田苗。喜自將拄杖、懸挂袈裟、標于畎澗中。其虫将下、遂厲声叱之、悉翻飛而去。十頃之苗、斯年独稔。其感通如此。

初め、喜は雪川に<sup>(19)</sup>寓居す。広明元年（八八〇）の夏、蝗有りて飛んで天を翳<sup>(20)</sup>し、下つて田苗を食う。喜、自ら拄杖を將つて、袈裟を懸挂して、畎澗の中に標<sup>(21)</sup>つ。其の虫将に下らんとするに、遂に声を厲<sup>(22)</sup>して之を叱すれば、悉く翻飛して去る。十頃の苗、斯の年独り稔<sup>(23)</sup>る。其の感通すること此の如し。

⑦或云、所伝得馬祖細納袈裟、以爲信宝矣。

或るひと云う、「伝うる所は、馬祖の細納の袈裟を得て、以て信宝と為す」。

⑧遷葬之後、天復二年壬戌八月中、宣城帥田頽、応杭將許思叛渙、縱兵大掠。發喜塔、見肉身不壞、如入禪定、髮爪俱長。武肅王奇之、遣裨將邵志祭。後重封瘞焉。

（大正藏五〇・七八三下／七八四上）

遷葬の後、天復二年壬戌（九〇二）八月中に、宣城の帥田頽<sup>(22)</sup>、杭將許思の叛渙<sup>(23)</sup>に応じて、兵を縱つて大いに掠む。喜の塔を發くに、肉身壞<sup>(24)</sup>れず、禪定に入るが如く、髮爪俱に長ぶるを見る。武肅王、之を奇として、裨將邵志<sup>(25)</sup>を遣わして祭らしむ。後に重ねて封じて焉を瘞<sup>(26)</sup>む。

## （2）無著文喜禪師伝（『鳳凰山聖果寺志』所収）

①師嘉興語溪人、朱氏子。憲宗元和十五年三月初三日寅時生。七歳出家聖果寺國清剃染。開成二年、初受具、習律聽

師<sup>(24)</sup>は嘉興語溪の人にして、朱氏の子なり。憲宗元和十五年（八二〇）三月初三日の寅時に生まる。七歳にして、聖

教。属会昌澄汰、反服韜晦。大中初、重例懲度于鹽官齊峯<sup>(マサ)</sup>寺。

②後謁大慈山性空禪師。空曰、子何不徧參乎。

果寺<sup>(26)</sup>の国清に出家して剃染す。開成二年（八三七）、初めて受具し、律を習い教を聴く。会昌の澄汰に属し、服を反して韜晦す。大中の初め（八四七）、重ねて懲度を鹽官の齊峰寺<sup>(27)</sup>に例す。

後に大慈山性空禪師に謁す。空曰く、「子、何ぞ、徧參せざる」。

③師直往五台山華嚴寺、至金剛窟、礼謁遇一老翁牽牛而行。邀師入寺。翁呼均提。有童子応声出迎。翁縱牛、引師陞堂。堂宇皆耀金色。翁踞牀指繡墩命坐。翁曰、近自何来。師曰、南方。翁曰、南方仏法、如何住持。師曰、末法比邱少奉戒律。翁曰、多少衆。師曰、或三百、或五百。師却問、此間仏法如何住持。翁曰、龍蛇混雜、凡聖同居。師曰、多少衆。翁曰、前三三、後三三。翁呼童子致茶、并進酥酪。翁拈起玻瓈蓋問曰、南方還有這箇否。師曰、無。翁曰、尋常將甚麼吃茶。師無對。師覩日色稍晚、遂問翁、擬欲一宿、得否。翁曰、汝有執心在。不得宿。師曰、某甲無執心。翁曰、汝曾受戒否。師曰、受戒久矣。翁曰、汝若無執心、何用受戒。師辭別。翁令童子相送。師問童子、前三三、後三三、是多少。童子召大德。師應諾。童子曰、是多少。師曰、此為何處。童子曰、此金剛窟般若寺也。師恍然悟、彼翁者、文殊也。即稽首童子願乞一言為別。童子曰、面上無嗔供養具、口裏無嗔吐妙香、

心裏無嗔是珍宝。無垢無染是真常。言訖均提与寺俱隠。

を擬<sup>ほ</sup>欲す、得<sup>よ</sup>きや。翁曰く、「汝、執心有らん。宿するを得ず」。師曰く、「某甲、執心無し」。翁曰く、「汝曾て受戒するや」。師曰く、「受戒して久しう」。翁曰く、「汝若し執心無ければ、何ぞ受戒を用いん」。師、辞して別る。翁、童子をして相い送らしむ。師、童子に問う、「前三三、後三三、是れ多少ぞ」。童、「大徳」と召す。師、応諾す。童子曰く、「是れ多少ぞ」。師曰く、「此は何の処と為すや」。童曰く、「此は金剛窟の般若寺なり」。師、恍然として悟る、「彼の翁は、文殊なり」。即ち童子を稽首して、願いて一言もて別れと為すを乞う。童子曰く、「面上に嗔無ければ供養<sup>そな</sup>具<sup>は</sup>わる、口裏に嗔無ければ妙香を吐<sup>は</sup>く、心裏に嗔無ければ是れ珍宝なり。無垢無染なれば是れ真常なり」。言い訖<sup>おわ</sup>るや、均提と寺と俱に隠る。

④懿宗咸通三年、師至洪州龍興觀音院、參仰山寂禪師、頓悟心法、令為典座。有異僧就求斎食。師減己饋之。仰山預知問曰、適來果位人、汝給食否。師曰、輶<sup>じゆ</sup>廻施。仰山曰、汝大利益。

懿宗咸通三年(八六二)、師、洪州の龍興觀音院に至り、仰山寂禪師に参じ、心法を頓悟して、典座と為さしむ。異僧有りて就いて斎食を求む。師、己のものを減じて之に饋<sup>すす</sup>む。仰山は預じめ知りて問うて曰く、「適來<sup>せきらい</sup>、果位の人々に、汝、食を給するや」。師曰く、「己のものを輶<sup>じゆ</sup>めて施を廻らす」。仰山曰く、「汝、大いに利益あらん」。

⑤又一日見文殊跨獅子縁<sup>また</sup>鼎側、師呵曰、文殊自文殊、文喜自文喜、遂掌。文殊湧空曰、苦瓠連根苦、甜瓜徹蒂甜。修行三

大劫、却為老僧嫌。因去不復見。

⑥咸通七年、旋浙右、築室千頃山居之。会巢寇之乱、避地湖州仁王院。光啓三年、錢武肅王、請住余杭龍泉寺解署。令<sup>(今カ)</sup>慈光院。

⑦僧問、如何是涅槃相。師曰、香烟尽處驗。

⑧如何是仏法大意。師曰、喚院主來、這師僧患顛。

⑨問、如何是自己。師默然。僧罔措。再問、師曰、青天蒙昧。不向月邊飛。

⑩大順元年、錢王奏賜紫衣、請師住聖果。乾寧四年、又奏賜無著徽號。光化己未又移居無著院。于十月廿七日夜子時、告衆曰、三界心盡、即是涅槃。言訖跏趺而逝。時方丈發白光、林木同色。世壽八十、臘六十。十一月二十二日、奉全身、塔于靈鷲山之無垢院。

遂に掌す。文殊、空より湧いて曰く、「苦瓠は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し。修行すること三大劫、却つて老僧の為に嫌わる」。去るに因りて復びは見れず。

咸通七年(八六八)、浙右に旋り、室を千頃山に築きて之に居す。巢寇の乱に会い、地を湖州仁王院に避く。光啓三年(八八七)、錢武肅王、請して余杭<sup>(今)</sup>の龍泉寺の解署に住せしむ。今の慈光院なり。

僧問<sup>(31)</sup>、「如何なるか是れ涅槃の相」。師曰く、「香烟の尽きる處に驗せ」。

(問う)「如何なるか是れ仏法の大意」。師曰く、「院主を喚び來たれ、這の師僧、顛を患う」。

問う、「如何なるか是れ自己」。師、默然たり。僧、措くこと罔し。再び問うに、師曰く、「青天蒙昧なり。月邊に向かつて飛ばず」。

大順元年(八九〇)、錢王、奏して紫衣を賜い、師を請して聖果に住せしむ<sup>(32)</sup>。乾寧四年(八九七)、又た奏して無著の徽號を賜う。光化己未(八九九)、又た移りて無著院<sup>(33)</sup>に居す。十月廿七日夜子の時に、衆に告げて曰く、「三界の心尽きれば、即ち是れ涅槃なり」。言い訖りて跏趺して逝く。時に方丈より白光を發し、林木、色を同じくす。世壽八十、臘六十。十一月二十二日、全身を奉じて、靈鷲山の無垢院に塔

す。

(11) 哀帝天祐二年、宣城帥田頽、応杭將許思叛、將縱兵大掠。發師塔、肉身不壞、髮爪俱長。錢王鏐聞奇之、遣裨將邵志、重加封瘞。

(12) 至宋慶元中、韓侂胄取為壽地、遷院靈石山下。止存其塔。及楊郡王復取為壽地、遂啓塔、乃陶龕也。容色如生、髮垂至肩、指爪繞身。留三日不壞。茶毘舍利無數。

(13) 寧宗嘉定十三年、遷瘞大慈山智覺壽禪師塔左。

(『中國仏寺志』卷二〇一三一丁右~三三丁右)

宋の慶元中(一一九五~一二〇〇)、韓侂胄取りて壽地と為し、院を靈石山の下に遷す。止だ其の塔のみ存す。楊郡王<sup>35</sup>、復た取りて壽地と為すに及んで、遂に塔を啓くに、乃ち陶龕なり。容色は生けるが如く、髮垂れて肩に至り、指爪は身を繞る。留ること三日するも壞れず。茶毘するに舍利無数なり。

寧宗嘉定十三年(一二二〇)、遷して大慈山の智覺壽禪師<sup>37</sup>の塔の左に瘞む。

### (3) 仰山慧寂に參ず(以下、『景德伝燈錄』卷一二)

① 杭州文喜禪師、嘉禾御兒人也。姓朱氏。七歳出家。唐開成二年、趙郡具戒、初習四分律。屬会昌廢教、返服韜晦。大中初、例重懺度於鹽官齊峰寺。

杭州文喜禪師<sup>38</sup>は、嘉禾の御兒の人なり。姓は朱氏。七歳にして出家す。唐の開成二年(八三七)、趙郡にて具戒し、初め四分律を習う。会昌の廢教に屬して、服を返して韜晦す。大中の初め(八四七)、例によって、重ねて鹽官の齊峰寺に懺度す。

② 後謁大慈山性空禪師。性空曰、子何不偏參乎。咸通三年、

後に大慈山性空禪師に謁す。性空曰く、「子、何ぞ偏參せ

至洪州觀音院、見仰山、言下頓了心契。仰山令典常住。一日有異僧、就求斎食。師減己分饋之。仰山預知問曰、適來果位人、汝給食否。答曰、輒已迴施。仰山曰、汝大利益。

ざる。咸通三年（八六二）、洪州觀音院に至りて仰山に見え、言下に頓に心契を了る。仰山は常住を典らしむ。一日、異僧有りて、就いて斎食を求む。師は己が分を減じて之に饋す。仰山は預じめ知りて問うて曰く、「適來、果位の人に汝、食を給うや」。答えて曰く、「己のものを輒めて施を迴らす」。仰山曰く、「汝、大いに利益せり」。

#### （4）仁王院・龍泉院に住す

七年旋浙右、止千頃山、築室而居。会巢寇之乱、避地湖州、住仁王院。光啓三年、錢王請住龍泉解署。院。今慈光

七年（八六六）、浙右に旋り、千頃山に止まり、室を築きて居す。巢寇の乱に会いて、地を湖州に避け、仁王院に住す。光啓三年（八八七）、錢王、請して龍泉の解署（今の慈光院なり。）に住せしむ。

#### （5）涅槃の相とは何か

僧問、如何是仏法大意。師曰、香煙尽處驗。

僧問う、「如何なるか是れ涅槃の相」。師曰く、「香煙尽くる處に驗せ」。

#### （6）仏法の大意とは何か

問、如何是仏法大意。師曰、喚院主來。這師僧患顛。

問う、「如何なるか是れ仏法の大意」。師曰く、「院主を喚び來たれ。這の師僧、顛を患う」。

## (7) 自己とは何か

問、如何是自己。師默然。僧罔措。再問、師曰、青天蒙昧。不向月辺飛。

問う、「如何なるか是れ自己」。師、默然たり。僧、措くこと罔し。再び問うに、師曰く、「青天蒙昧なり。月辺に向かつて飛ばず」。

## (8) 晩年の行状

①大順元年、錢王表薦賜紫衣。乾寧四年、又奏師号、曰無著。光化三年、示疾。十月二十七日夜子時、告衆曰、三界心尽、即是涅槃。言訖跏趺而終。寿八十、臘六十。終時方丈發白光、竹樹同色。十一月二十二日、遷塔靈隱山西塲。

大順元年（八九〇）、錢王、表薦して紫衣を賜う。乾寧四年（八九七）、又た師号を奏して無著と曰う。光化三年（九〇〇）、疾を示す。十月二十七日夜子の時に衆に告げて曰く、「三界の心尽きれば、即ち是れ涅槃なり」。言い訖りて跏趺して終る。寿八十、臘六十。終る時、方丈より白光を発し、竹樹色を同じくす。十一月二十二日、塔を靈隱山の西塲に遷す。

②天祐二年、宣城帥田頽、応杭將許思叛換、縱兵大掠。發師塔、覗肉身不壞、髮爪俱長。武肅王奇之、遣裨將邵志、重封瘞焉。

天祐二年（九〇五）、宣城の帥田頽、杭將許思の叛換に応じて、兵を縱つて大いに掠む。師の塔を發くに、肉身壞れず、髮爪俱に長ぶるを覗る。武肅王、之を奇として、裨將邵志を遣わし、重ねて封じて焉を瘞む。』

(1) 嘉禾の禦兒<sup>ハシナ</sup>文喜（八二一—九〇〇）。浙江省嘉興府崇德県の東郭下にある語兒郷の古の地名（『至元嘉禾志』卷三）。

(2) 僧清国<sup>ハシナ</sup>文喜のおじに当る外は伝不詳。常樂寺については、『至元嘉禾志』卷一の崇德県の寺院の項に次のようにある。

崇福寺、県の西八十歩に在り。考証。梁天監二年（五〇三）、常樂寺と名づく。唐の会昌の年に廢る。大中十年（八五六）、重立す。宋の大中祥符二年（一〇〇九）、改めて悟空院と為す。天禧二年（一〇一八）六月十五日、今名に改む。建炎の兵火にて廃れ、後に重立

す。唐の無着禪師の贊寧の碑記有り。師は嘉禾の禦兒の人なり。寺の東北隅に九品觀堂有り。

また、同卷一四の仙梵の項には、文喜の伝が簡単に示されている。

無着禪師文喜。俗姓は朱氏、語児の人なり。七歳にして崇福僧を授礼して師と為す。大慈山の性空禪師を参礼して送供す。台山に往きて禪僧を参礼す。光啓三年（八八七）、吳越王、無着と賜号す。光化二年（八九九）、衆に告げて曰く、「三界の心尽きれば、是れ涅槃なり」。言い訖りて趺坐して化す。

その外にも、同卷二六には、嘉定十三年（一二二〇）十一月に望棘庵沙寧の記した「崇福寺記」、慶元三年（一一九七）十月旦に文林郎新滁州州学教授の陸埃の記した「崇福田記」、同年一月日に従政郎新隆興府錄事參軍の蔡開の記した「崇福寺藏記」がある。

(3) 越州開元寺||越州の開元寺は二つある。『嘉泰会稽志』卷七の「大善寺」の項に次のようにある。  
大善寺。府の東一里百一十歩に在り。梁の天監三年（五〇四）、民の黃元宝、地を捨つ。錢氏の女、未だ嫁せずして死す。遺言に廬中の資にて寺を建つるを以てす。僧澄貫、其の役を主り、未だ期年ならずして成る。賜わりて大善と名づく。屋棟に題字有りて云く、「天監三年歲甲申に次る十二月庚子朔八月丁未なり」。唐開元二十六年（八三八）、改めて開元と名づく。後唐の長興元年（九三〇）、吳越の武肅王、別に今の開元を創む。乃ち大善の旧名に復す。

もう一つの開元寺については、次のようにある。

開元寺。府の東南二里一百七十歩に在り。節度使董昌の故第なり。後唐長興元年、吳越の武肅王建つ。奏して開元を以て復して大善寺と為して、此を以て開元寺と為す。

旧名の開元寺である大善寺を文喜伝では言うのであろう。

(4) 趙郡||河北省真定府趙県のこと。後述の注（8）のよう、當時、ここで相部律を学んだ人に千頃楚南がいる。

(5) 塩官の齊豐寺||『咸淳臨安志』卷八五の鹽官縣の寺觀の項に次のようある。

安國禪寺。縣の西北二百五十歩に在り。唐の開元元年（七一三）、建ち、鎮國海昌と名づく。会昌五年（八四五）、廢る。大中四年（八五〇）、復た置き、齊豐と名づく。祥符元年（一〇〇八）、今額に改む。照寧七年（一〇七四）、僧居則、大悲閣を建つ。蘇文忠公、梁に題す。明年、之の為に記す。藏殿の後に唐の会昌の石經幢二つ有り。寺門の東に咸通の石幢一つ有り。殿の下にも二つ在るも、歲月字画の類無し。唐人悟空禪師の塔の前に古檜有り。宣和の間に朱勔移して以て去る。

、この中にもみられるように杭州鹽官の鎮國海昌院と言えば、馬祖の法嗣の悟空禪師齊安が会昌二年一二月二二日（新暦の八四三年一月二十五日）に九〇余歳で亡くなるまで二〇年以上活躍していた所である。ここで文喜が馬祖系統の禪を知る機会は十二分に予想され

る。

(6) 大慈山性空禪師<sup>1</sup> = 實中(七八〇—八六二)の伝は『宋高僧伝』卷一二にある。俗姓は盧氏、山西省河東蒲坂の人である。百丈懷海の法嗣。杭州大慈山に道場を開く。咸通三年二月一五日示寂す。世寿八三、法臘五四。乾符四年(八七七)に僖宗は性空大師の号を謚す。

大慈山定慧禪寺については、『武林石刻記』の中に次の記録があり、宋濂の『虎跑泉銘』と共に参考になる。

寺は西湖の南山に在り。始め唐の元和十四年(八一九)に、實中禪師、卓錫して庵を此に結ぶ。相従う問道者衆<sup>2</sup>く、水を以て給するに乏く。二虎の山泉の源を跑くに感じて湧沸する故に虎跑泉と称す。憲宗、額を賜いて広福院と為す。宣宗の大中八年(八五四)、額を大慈禪寺に改む。僖宗の乾符年間(八七四—八七九)、勅して定慧の二字を加え、殿宇崇盛たり。宋の高宗南渡して鬱攸の変を経て、遂に瓦礫の墟と為る。宝佑の初(一二五三)、僧至惠、屋を結んで以て居す。宋末、兵燐く有り。(以下略)

『咸淳臨安志』卷七七では、「祖塔法雲院」の項があるが、詳細ではない。

(7) 仰山に見ゆ=仰山慧寂の注(6) 参照。

(8) 千頃山=『咸淳臨安志』卷五の昌化県の寺院の項に次のようにある。

千頃山龍興寺。県の西北六十里に在り。元和の間(八〇六—八二〇)、黃蘖禪師、山を開く。中和四年(八八四)、慈雲禪師<sup>3</sup>の額を賜わる。天聖元年(一〇二三)、祥符寺僧惠新、移して山顛勝絶の境に創む。八年(一〇三〇)、今額を賜わり、歳の度僧五人なり。

千頃山と言えば、黃蘖希運の法嗣に楚南(八一三—八八八)がいる。俗姓は張氏、閩の人である。開元寺の曇謙の下で出家す。長慶二年(八二二)二〇歳のとき、五台山で受戒し、趙郡で相部律を学んだ。文喜も少し遅れて四部律を学んだことは注意してよいであろう。黃蘖希運の法を嗣いで、破仏後に、裴休の請により、師と共に宛陵(安徽省宣城)に従つた。蘇州報恩寺(觀音禪院)に住すること二〇余年。乾符四年(八七七)、蘇州太守周慎嗣に請されて、寶林寺に住し、支硎山に移つた。翌年、昌化県令徐正元らに請せられて千頃慈雲院に住するのである。文徳元年五月に示寂す。世寿七十六、僧臘五十六である。

これによつて、文喜が庵居したのは、楚南以前であることがわかる。元来、黃蘖希運の開いた山であるから、楚南を請するのに、文喜の何らかの働きかけがあつたかも知れない。

(9) 劉嚴<sup>4</sup>=伝不詳。

(10) 龍泉古城院=『國訳一切經』に龍泉(廬州府)の古城院と解するが、前後の文面より、鈴木哲雄博士の『唐五代禪宗史』一四二頁のよう、余杭県の靈源院とすべきであろう。『咸淳臨安志』卷八三の余杭県の寺院の頃に次のようにある。

靈源院。県の東南一十二里の安樂郷に在り。旧と龍泉と名づく。咸通七年（八六六）に建つ。治平二年（一〇六五）に今額に改む。

『余杭縣志』卷一五によれば、開山を善本と伝える。文喜の入院は、その後を継いだのかもしれない。

(11) 余不亭＝不詳。注(18)を参照。

(12) 刺史杜孺休＝杜孺休（？—八九〇）、祖父は佑、父は悰<sup>そ</sup>、兄は裔休。字を休之という。乾符六年（八七九）、戸部郎中より選司勲郎中となつて湖州刺史となる。中和三年（八八三）に再授さる。後に給事中に遷る。大順初年（八九〇）、蘇州刺史となつたが、錢鏐の使いの海昌都将沈粲に殺された。『新唐書』卷一六六、『吳興志』卷一四参照。

(13) 仁王院＝湖州烏程県の西北九里にある仁王山（旧と鳳凰山と名づく）の中に護国仁王院があり、唐の咸通中に今額を賜わつたと伝える。『吳興志』卷一三および同卷四参照。

(14) 武肅王……＝武肅王錢鏐（八五二—九三二）が、光啓三年正月七日、杭州刺史になつたことをさす（『資治通鑑』卷二五六）。同日に董昌が浙東觀察史となるが、やがて錢鏐が董昌の乱を治めて、吳越を建国することになる。拙著『宋代禪宗史の研究』七四頁以下参照。

(15) 慈光院＝鈴木博士は、注(10)の著の中で、廡署は役所のことで廡院をさすので、錢鏐の住地である衣錦郷（安樂郷）から考えて、余杭県の靈源院（龍泉寺）と同じとする。後に紹介する『鳳凰山聖果寺志』も余杭とするので、鈴木説は妥当と考えられる。

(16) 威勝軍節使董昌＝董昌（？—八九六）、杭州臨安の人。光啓三年に浙東觀察吏（威勝軍節度使）となり、乾寧二年（八九五）二月三日、自ら帝位に即き、大越羅平国と称し、順天と改元した。翌年五月十九日、錢鏐の部下の吳璋に斬殺された。『新唐書』卷二二五下参照。

(17) 無著と曰う＝無著と呼ばれる人に、『宋高僧伝』卷二〇に唐代州五台山華嚴寺無著伝が立伝されている。『雪竇頌古』三五則の「文殊前後三三」の話に出る無著は、この五台無著であるが、『仏祖通載』卷一五や『五燈会元』卷九などで、無著文喜に誤まられていく。五台無著は、牛頭慧忠（六八三—七六九）の法嗣であり、はつきり別人である。『宋高僧伝』卷二〇の五台無著伝は、初期の行状がはつきりしないので、『廣清涼伝』卷中の「無著和尚入化般若寺」の項を『國訳一切經』に使用された前田本を参照して、参考のために次にかかげておきたい。

①僧無著、姓董氏、温州永嘉人也。天姿穎抜、毅然不群。爰白童蒙、岐嶷成性。年十二、依本州龍泉寺大德猗律師出家。誦大乘經數十万偈。唐天寶八年、以業優得度。二十一歲、始

僧の無著は、姓は董氏<sup>とう</sup>、温州永嘉の人なり。天姿穎抜、毅然として群ならず。爰に童蒙のときより、岐嶷として性を成す。年十二にして、本州の龍泉寺の大徳の猗律師に依りて出

紹師業、首習毘尼、因詣金陵牛頭山忠禪師、參定心要、厲節無虧。寸陰不捨、研窮理性、妙契本源。忠謂師曰、汝志性聰敏、宜自開發。衆生與仏、元無別心。如雲翳若除、虛空本淨。無著言下頓開法眼。東山秘旨、有所歸焉。

②雖道無不在、而境勝易從。遠詣台山、志求大聖。大曆二年正月、發跡浙右、夏五月初、至清涼嶺下。時日暮、倏見化寺。鮮華絕世。因扣扉請入。有一童子、自名胸脰者。啓扃出應。無著請童子、入白寺主、以昏夜寓宿。童子得報、延無著入。主僧賓接、僧人問禮。問曰、師自何來。無著具對。又曰、彼方仏法何如。答、時逢像季、隨分戒律。復問、衆有幾何。曰、或三百、或五百。無著曰、此處仏法如何。答云、龍蛇混跡、凡聖同居。又問、衆有幾何。答云、前三三与後三三。無著乃良久無對。主僧云、解否。答云、不解。主僧云、既不解、速須引去。無宜久止。命童子送客出門。無著問曰、此寺何名。答、清涼寺。童子曰、早來。所問前三三与後三三、師解否。曰、不能。童子曰、金剛背後、爾可觀之。師乃

家す。大乘經の數十万偈を誦す。唐の天寶八年(八四九)、業の優れたるを以つて得度す。二十一歳にして、始めて師の敏、宣自開發。衆生與仏、元無別心。如雲翳若除、虛空本淨。無著言下頓開法眼。東山秘旨、有所歸焉。  
業を紹ぎ、首に毘尼を習い、因つて金陵の牛頭山の忠禪師に詣で、心要を參定し節を厲まして虧くこと無し。寸陰も捨てず、理性を研窮し、本源に妙契す。忠、師に謂いて曰く、「汝、志性は聰敏なり、宜しく自ら開發すべし。衆生と仏とは元<sup>も</sup>と別心無し。雲翳若し除かば虚空は本より淨かなるが如し」。無著は言下に法眼を頓開す。東山の秘旨は帰するところ有り。

道在<sup>あ</sup>らざる無しと雖も、境勝従い易し。遠く台山に詣り、志、大聖を求む。大曆二年(七六七)正月、跡を浙右に發して、夏五月の初め、清涼の嶺下に至る。時に日暮れ、倏<sup>たちま</sup>化寺を見る。鮮華なること絶世なり。因りて扉を扣き、入らんことを請ふ。一童子の自ら胸脰と名づくるもの有り。扃<sup>かんぬき</sup>を開き出でて応ず。無著は童子に請う、「入りて寺主に白し、昏夜なるを以つて寓宿せしめられんことを」。童子は報を得て、無著を延いて入らしむ。主僧の賓接すること人間の礼の如し。問うて曰く、「師は<sup>いざ</sup>より來たれるや」。無著具に對う。又た曰く、「彼の方の仏法は<sup>いかん</sup>何如」。答う、「時は像季に逢うも、分に随つて戒律す」。復た問う、「衆は<sup>いくば</sup>幾何く有りや」。曰く、「或は三百、或は五百」。無著曰く、「此の處の仏

迴視、化寺即隱。無著愴然久之。即說偈曰、廓周沙界聖伽藍、滿目文殊接話譚。言下不知開何印、迴頭祇見旧山巖。無著既出、坐而待旦、天曉即路。是月望日、屆華嚴寺衆堂安止。

③次月朔日、維那白、斎後大衆、各備盞啜茶。有一老人。持盞付無著云、啜茶訖、送金剛窟來。無著受教。少頃茶畢。衆散。無著坐食堂南床上。見一老人僧踞北床。問無著云、師從南方來。持得好念珠來否。無著云、無。但有龜珠耳。老僧請看。無著與之、遂失所在。

法は如何」。答えて云く、「龍蛇は跡を混じ、凡聖は同居す」。又た問う、「衆は幾何く有りや」。答えて云く、「前三三と後三三」。無著乃ち良久して対うこと無し。主僧云く、「解するや」。答えて云く、「解せず」。主僧云く、「既に解せんば、速かに須らく引き去るべし。宜しく久しう止まるべからざれ」。童子に命じて、客を送つて門を出でしむ。無著問うて曰く、「此の寺を何と名づくるや」。答う、「清涼寺」。童子の曰く、「早く來たれ。問うところの前三三と後三三とは師解するや」。曰く、「能わず」。童子曰く、「金剛の背後にて、爾<sup>なんじ</sup>之れを觀るべし」。師乃ち迴りて視るに、化寺は即ち隱る。無著は愴然として、久しうす。即ち偈を説きて曰く、「沙界を廓周して聖伽藍あり。満目の文殊、話譚に接す。言下、知らず、何<sup>いかな</sup>る印をか開く。頭を迴らせば祇<sup>た</sup>だ見る旧山の巖のみ」。無著既に出で、坐して旦<sup>あさ</sup>を待ち、天曉に路に即く。この月の望日、華嚴寺の衆堂に届つて安止す。

次月の朔日、維那の白す、「斎後に大衆は各おの盞を備えて茶を啜らん」。一老人有り、盞を持って無著に付して云く、「茶を啜り訖らば、金剛窟に送り來たれよ」。無著は教を受く。少頃にして茶畢<sup>おわ</sup>り、衆散す。無著は食堂の南床の上に坐す。一老人の僧の北床に踞るを見る。無著に問うて云く、「師は南方より来る。好き念珠を持ち得來たるや」。無著云

く、「無し。但ただだ龐珠たまな有るのみ」。老僧は看んみことを請う。無著之れに与うるや、遂に所在を失う。

④翌日中昃、坐般若院經藏樓前、有二吉祥鳥。當無著頂上、徘徊飛翔、數匝東北而去。越三日、景正東時、坐房中、見白光二道。至無著頂上而滅。同房僧法賢等、具見。無著大駭曰、是何祥瑞。乞再現之、決弟子疑網。言訖再現、久而方滅。

⑤無著是日正中時、獨詣金剛窟。既至、礼十余拜、即坐而少憩。忽如昏寐。睡中聞人叱牛數聲、似令飲水者。無著驚覺、倏見一老人。年及耄期、弊巾苧服、足履麻屨、牽牛而行。無著前執老人手、因拝問曰、從何方來。曰、山下丐糧去來。無著曰、家居何所。曰、在此台山。老人問曰、師何因來此。無著曰、伝聞此地有金剛窟。故來禮拝。老人曰、師困耶。無著曰、不也。曰、師既不困、何緣昏睡。無著曰、凡夫昏沈、何足為怪。老人曰、師昏沈、請師少息啜茶得否。無著許諾。老人手指東北。無著隨觀、見一寺。僅五十余步。老人牽牛前導、無著踵後。既抵門闈。老人呼君提數声。有童子、啓扉而出、見無著伸礼。即牽牛入、延無著入。但見其地平坦、淨琉璃色。堂舍廊宇、悉皆黃金、其堂

無著は是の日の正中の時、独り金剛窟に詣る。既に至りて礼すること十余拜するや、即ち坐して少しく憩う。忽ち昏寐するが如し。睡中、人の牛を叱ること數声、水を飲ましむるに似たるもの聞く。無著は驚き覚めるや、倏ち一老人を見る。年は耄期に及び、弊れたる巾、苧からむしの服、足に麻屨たぢまを履き、牛を索きて行く。無著は前まへんで老人の手を執り、因つて拝して問うて曰く、「何くの方より來たるや」。曰く、「山下に糧を丐わんがために去來す」。無著曰く、「家居は何なる所ぞ」。曰く、「此の台山に在り」。老人問うて曰く、「師は何に因りてか此に來たるや」。無著曰く、「伝え聞く、この地に金剛窟ありと。故に來たつて禮拝す」。老人曰く、「師は困ずるや」。無著曰く、「不なり」。曰く、「師は既に困ぜざれば、

三架、東西両掖、各一楹。老人延無著升堂、自坐柏木牙床。指一錦襍、令無著坐。童子送茶二器。皆瑠璃蓋。酥蜜各一器、即玳瑁椀。老人謂無著云、南方有此物不。無著云、無。又云、南方既無此物、甚裏喫茶。無著不對。老人曰、且喫茶。啜畢。

⑥老人曰、師出家、作何事業。無著云、都無事業。大小乘中、亦無功課、遣日而已。老人曰、師初出家時、本求何事。曰、本求大果。曰、師以初心修習即得。復問、師年幾許。曰、三十一。老人曰、師年至三十八、宿福必至。復於

何に縁つてか昏睡するや。無著曰く、「凡夫の昏沈は何んぞ怪しみを為すに足らんや」。老人曰く、「師昏沈せば、請うらくは、師の少しく息みて、茶を啜り得んや」。無著は許諾す。老人は手ずから東北を指す。無著は隨いて観るに一寺を見る。僅かに五十余歩ばかりなり。老人は牛を牽きて前導し、無著は後に踵く。既にして門の闇に抵る。老人は君提を呼ぶこと数声す。童子有り、扉を啓いて出で、無著を見て伸礼す。即ち牛を牽ひて入り、無著を延ひて入る。但だ其の地の平坦にして淨琉璃色なるを見る。堂舍廊宇は悉く皆な黄金、其の堂は三架にして、東西の両掖は各おの一楹なり。老人は無著を延いて堂に升らしめ、自ら柏木の牙床に坐す。一錦襍を指して無著をして坐せしむ。童子は茶二器を送る。皆な、瑠璃の蓋なり。酥・蜜各おの一器、即ち玳瑁の椀なり。老人は無著に謂いて云く、「南方には此の物有りや」。無著云く、「無し」。又た云く、「南方に既に此の物無ければ、甚<sup>なに</sup>裏をもつて茶を喫するや」。無著は対えることなし。老人曰く、「且く茶を喫せよ」。啜り畢る。

老人曰く、「師は出家して何の事業をか作すや」。無著云く、「<sup>大</sup>都て事業無し。大小乗の中、亦た功課無く、日を遣るのみ」。老人曰く、「師初めに出家するの時、本と何事を求むるや」。曰く、「本と大果を求む」。曰く、「師は初心を以つて

此地有縁。謂無著云、徐徐而帰。好看道路、勿損手足。吾方且偃息。

修習すれば即ち得し。復た問う、「師、年幾<sup>いくば</sup>くぞや」。曰く、「三十一」。老人曰く、「師、年三十八に至れば、宿福必らず至らん。復た此の地に於て縁有らん」。無著に謂いて云く、「徐徐にして帰れ。好く道路を看、手足を損ずること勿れ。吾れ方に且らく偃息せん」。

⑦無著請留一宿。老人不許曰、師緣有両伴。不見師帰、即懷憂惱。不当住此。縁師有執处在也。無著云、出家之人、有何執處。雖有行伴、亦不顧恋。老人曰、師常持三衣否。無著曰、自受戒已來持之。老人曰、此是執處也。無著曰、亦有聖教在。若許住宿、正念捨之。又曰、曾聽律否。曰、曾聽。老人曰、准律云、明相小乘無難、不得捨衣。師早下。老人即起、無著亦起。相隨至堂前立。老人説偈云、若人靜坐一須臾、勝造恒沙七寶塔。寶塔畢竟壞微塵、一念淨心成正覺。偈畢、顧童子送之出寺。老人撫無著背云、師好去。

無著は留まりて一宿せんことを請う。老人許さずして曰く、「師は両伴有るに縁り、師の帰るを見ざれば即ち憂惱を懷かん。當に此に住まるべからず。師は所在に執するところの有るに縁ればなり」。無著云く、「出家の人の何の執するところ有らん。行伴有りと雖も亦た顧恋せず」。老人曰く、「師は常に三衣を持するや」。無著曰く、「受戒してより已來<sup>このかた</sup>之れを持つ」。老人曰く、「此は是れ執する処なり」。無著曰く、「亦た聖教の在る有り。若し住宿するを許さば、念を正して之れを捨てん」。又た曰く、「曾て律を聞きしや」。曰く、「曾て聽けり」。老人曰く、「律に准ずるに云く、『明相。小乗は難きこと無ければ、衣を捨つるを得ず』と。師早く下り去れ」。老人即ち起ち、無著も亦た起つ。相隨つて堂前に至つて立つ。老人は偈を説いて云く、「若し人、靜坐すること一須臾ならば、恒沙の七寶塔を造るに勝る。寶塔も畢竟、壞われて微塵とならん。一念の淨心のみ正覺を成す」。偈畢りて、童子を顧み、之れを送つて寺を出さしむ。老人は無著の背を

撫<sup>な</sup>でて云く、「師よ。好く去れ」。

⑧無著即退、至金剛窟邊。童子問曰、此何窟。無著云、名金剛窟。童子曰、金剛下更有何字。無著思惟久之、謂童子曰、下有般若字。童子曰、此即化般若寺也。無著執童子手、礼一拜取別。童子曰、迴礼聖賢。因說偈曰、面上無瞋供養具、口裏無瞋吐妙香。心裏無瞋是真寶、無染無著是真如。說是偈已、無著再拜。拳首不見童子。化寺亦隱。唯覩蒼山崔嵬。喬木蔚鬱。無著悲愴恋慕、佇立久之。因觀所遇老人之地、有白雲湧起、須臾遍谷。見文殊菩薩乘大師子、万聖翼從。凡食頃間、東有一段黑雲來過。菩薩即隱、少頃雲散。

⑨既而遇汾州菩薩寺僧修政等六人、同至金剛窟、遊礼聖迹。忽聞山石震吼、声如霹靂。群僧駭怖、奔走映藁、俄頃而息。修政等、詢問無著、乃具言所遇之事。修政等、慶聞靈跡、自恨不覩其事、即覩歎久之。乃依無著口、依實錄

無著即ち退いて金剛窟の辺に至る。童子が問うて曰く、「此れ何の窟なるか」。無著云く、「金剛窟と名づく」。童子曰く、「金剛の下に更に何の字ありや」。無著は思惟すること久しくして、童子に謂いて曰く、「下に般若の字あり」。童子曰く、「此れ即ち化般若寺なり」。無著は童子の手を執りて、礼すること一拜、別れを取る。童子曰く、「聖賢を迴り礼せん」。因つて偈を説きて曰く、「面上に瞋<sup>いが</sup>ること無ければ供養の具。口裏に瞋<sup>いが</sup>ること無ければ妙香を吐く。心裏に瞋<sup>いが</sup>ること無ければ是れ真の宝。染無く、著無きは是れ真如。」是の偈を説き已れるや、無著は再拜す。首を挙ぐるに童子を見ず。化寺も亦た隱る。唯だ蒼山の崔嵬たり、喬木の蔚鬱たるを観るのみ。無著は悲愴して恋慕し、佇立すること久しく述べて老人に遇うところの地を觀るに、白雲の湧起する有りて、須臾にして谷に遍ねし。文殊菩薩が大師子に乘じ、万聖の翼從したもうを見る。凡そ食頃の間、東に一段の黒雲の來たり過ぐる有り、菩薩即ち隠れたまい、少頃にして雲散す。

既にして汾州の菩薩寺の僧修政ら六人が同じく金剛窟に至りて、聖迹を遊礼するに遇う。<sup>たらま</sup>忽ち山石震え吼え、声は霹靂のごときを聞く。群僧は駭怖し、映藁に奔走し、俄頃にして息む。修政ら、無著に詢問したれば、乃ち具々に遇うところ

之、伝於遐邇、示後覽之者、注想靈峰矣。其無著、興修供養之事、具如別錄所載。此不繁述。

(10) 又華嚴鈔說、無著、厥後常思靈異、一日復在金剛窟、觀禮聖迹。遇一老人、命入無著。推其先入、老人即入。遂不復出。無著窟前佇立、都無所見。忽覩冠裳數人。朱紫服色儼。至窟前、相推而入。無著心疑、因詰其從者曰、此何人也、得入斯窟。答云、是一萬菩薩助帝、揚化諸處、任官歲久。職滿却歸此窟。蓋大聖文殊師利菩薩、見在窟中、講華嚴經。無著聞已、欣然隨入、行三兩步。石窟狹小、不容乃止。

の事を言う。修政ら靈跡を聞くを慶べども、自ら其の事を観ざりしを恨みて、即ち観歎すること久しうす。乃ち無著の口に依つて、實に依りて之れを録し、遐邇に伝え、後覽の者に示し、想を靈峰に注がしむ。其の無著が興修し供養せる事は、具に別錄に載するところの如し。此に繁述せず。

又た『華嚴鈔』に説く、「無著、厥の後常に靈異を思い、一日復た金剛窟に在りて、聖迹を觀礼す。一老人に遇いて、命じて無著をば入らしむ。其れを推して先に入らしめ、老人も即ち入る。遂に復た出でず。無著は窟前に佇立するも都て見るところ無し。忽ち冠裳の數人あるを覩る。朱紫の服色は儼たり。窟前に至り、相推して入る。無著は心疑ひ、因つて其の從者に詰ねて曰く、「此れ何人にして、斯の窟に入るを得るや」と。答えて云く、「是れ一万菩薩の助帝にして、諸処を揚化し、官に任ざること歲久し。職満ちて此の窟に却帰す。蓋し大聖文殊師利菩薩、見に窟中に在りて、『華嚴經』を講じたまう」と。無著聞き已りて欣然として随つて入り、行くこと三兩步す。石窟は狹小にして、容れざれば乃ち止む」。

(『大正藏』卷五一一一一中一一一三上)

(『國訳一切經』史伝部一八一七九八四頁参照)

(18) 塔を靈隱山……『咸淳臨安志』卷七八の次の無垢院がそれに相当しよう。

光化二年(八九九)、吳越王建つ。旧と無著と名づく。無著禪師の塔所に係る。嘉定十四年(一二二一)、移して今額を請う。院の後に雅雞巖及び仙人台有り。

(19) 雪川＝浙江省烏程県の東南一里にあり（『嘉泰興志』卷五）。因つて黄巢の乱の時に湖州に避地した時のことをする。

(20) 馬祖……＝当時の禪宗史の上で袈裟が問題にされる時には、必ず正系争いが予想される。このことが伝えられると言うことは、南嶽懷讓——馬祖道一——百丈懷海——鴻山靈祐——仰山慧寂——龍泉文喜の法系の正系を主張したことになろう。もしそのように解することができれば、多くの馬祖門下のうちで、浙江地方に展開した鴻仰宗にとって、龍泉文喜の占める位置は大きいものがある。仰山慧寂の勢力が、浙江地方にも注目されたことになる。

(21) 宣城の帥田頼＝田頼（？—九〇三）、字は徳臣、廬州（安徽省）合肥の人。景福元年（八九二）、宣州留後となる。天復三年（九〇三）、楊行密と越の軍に攻められ、一二月九日、台濠に殺される。拙著『宋代禪宗史の研究』八〇頁。『新唐書』卷一八九、『十国春秋』卷一三、『唐方鎮年表』卷五、『資治通鑑』卷二六四参照。

(22) 杭将許思……＝許思、伝不詳。『資治通鑑』卷二六三の天復二年八月十四日の条に武勇左都指揮使許再思あり、『十国春秋』卷七七も許再思とする。同年八月、許再思は武勇右都指揮使徐綰について錢鏐に離叛し、九月より一二月まで徐綰が田頼を召して杭州を攻め、一二月に楊行密にうながされて、田頼が徐綰や許再思と共に宣州に帰るまでの事件をさす。

(23) 補將邵志＝邵志、伝不詳。補將は副將をさす。

(24) 師……＝この伝は、注（17）に述べたように、無著文喜と五台無著を混同した『五燈会元』を受けたもので、信用おきがたいものである。しかし、無著文喜が開山とされる聖果寺との関係を、全く無視することはできないと思われる所以、ここに記載した。また、無著文喜が杭州においていかなる影響を与えたかを知るてがかりにもなろう。

(25) 元和十五年……＝元和十六年とすべきを元和十五年としたのは、寂年を一年早く誤ったためと考えられる。また生年の日時は一般に山志等になって始めて出て来る場合が多く、必ずしも信用できる資料ばかりではないと思われるが、開山については後世に新たな伝承が生まれて来たのであろう。

(26) 聖果寺＝注（2）から考えて、明らかに誤りである。『五燈会元』も「常樂寺（今の崇福なり）」とある。

(27) 齊峰寺＝注（5）参照。『景德伝燈錄』『五燈会元』も齊峰寺とする。

(28) 五台山華嚴寺＝以下の記事は、注（24）に指摘したように、『五燈会元』にほぼ基づくものである。文喜は、元来、五台山とは関係なく、注（17）のように、この記事は五台無著の伝であって、両人が混同されたものである。注（17）と比較されたい。

(29) 又た一日……＝この記事も『五燈会元』による。

(30) 余杭……＝龍泉解署の正確な位置は確かめられないが、注（15）のように解するのが妥当であろう。

(31) 僧問う……以下の三つの問答は、『景德伝燈錄』にもあるが、やはり『五燈会元』を承けたものであろう。

(32) 聖果に住せしむ=この資料が提供する最も重要な事柄である。『聖果寺志』には、正統九年(一四四四)に立石された苗表(一三八一一一四六〇)の撰になる『重建聖果寺碑記』が収められ、次のように書き出されている。

聖果寺は、武林城の南枕、鳳皇山の右翼に在り。隋の文帝の開皇二年(五八二)、始めて建つ。唐に至りて無着文喜禪師、重興す。宋の慶曆中(一〇四一~一〇四八)、郡守鄭戩奏して額を賜わり崇聖と曰う。宋の南渡の後、寺改めて苑と為る。(以下略)

『聖果寺志』の中には、文喜の住持を乾寧の間(八九四~八九八)と称している。このように、正統九年以前に聖果寺と文喜の関係は結びつけられていたのであるが、古い文献でそのことを言うことはない。『咸淳臨安志』卷七六は、錢氏が鳳皇山の右に聖果寺を建てたことは述べるが、文喜の関係については不明である。しかし聖果寺の開山と伝えられ、その時期が乾寧中であるところから、文喜とこの地が何らかの関係があつたことは認めてよいと思われる。

(33) 無著院=注(18)に指摘するように、この説は既に古くより存在した。

(34) 韓侂胄=韓侂胄(一一五二~一二〇七)、字は節夫、安陽の人。琦の曾孫。朱熹等を罪におとしいれた慶元党案で有名。『宋史』卷四七四に伝がある。

(35) 楊郡王=不明。

(36) 大慈山……=延寿(九〇四~九七五)、余杭の王氏。天台德韶の法嗣。慧日永明寺(淨慈寺)に住す。こも『五燈会元』の記事を承けており、大慈山は淨慈山の誤りである。

(37) 杭州文喜禪師=『景德伝燈錄』の内容は贊寧の伝に基づいたと思われ、『宋高僧伝』の記事と極めて近いものである。

## 六 五冠山順之

### (1) 五冠山瑞雲寺の開創(以下、『祖堂集』卷一〇の五冠山順之章)

①五冠山瑞雲寺和尚。嗣仰山寂禪師。師諱順之。俗姓朴氏、  
渙江人也。祖考並家業雄豪、世為邊將、忠勤之誉、遺慶在  
——俗姓は朴氏、渙江の人なり。祖考並な家業雄豪にして、世々

五冠山瑞雲寺和尚<sup>(1)</sup>。仰山寂禪師に嗣ぐ。師の諱は順之。

郷。母昭氏、柔範母儀、芬芳閭里。懷娠之日、頻夢吉祥。免腹之時、即多異瑞。昔賢知此、今又徵焉。及乎竹馬之期、漸有牛車之量。凡為嬉戲、必表殊常。已至十歲、精勤好學、屬詞詠志、即見凌雲、剖義談玄、如同照鏡。既登弱冠、道牙早熟。獸處喧華之地、長遊靜默之中。遂乃懇告二親、將隨縕侶。志不可奪、所天容許。便投五冠山剃髮。仍適俗離山、受具足戒。行同結草、心此護鵝。因遊公岳、忽遇神人邀請、化成宮闕、若兜率天。說法應緣、倏焉殄滅。若非德至行円、孰能致感如此也。

辺將（わきよし）と為り、忠勤の譽、在郷に遺慶す。母は昭氏（あきうじ）にして、母儀を柔範し、閭里に芬芳たり。懷娠の日、頻に吉祥を夢む。免腹の時、即ち異瑞多し。昔賢、此を知り、今又た焉を徵す。竹馬の期に及びて、漸く牛車の量有り。凡そ嬉戲を為すに、必ず殊常を表わす。已にして十歳に至り、精勤好学し、詞詠の志を属し、即ち凌雲（りょううん）に見えて、義を剖き玄を談ずること照鏡を同じくするが如し。既に弱冠に登りて、道牙早に熟す。喧華の地に處するを獸い、長く静默の中に遊ぶ。遂に乃ち懇ろに二親に告げ、將に縕侶に隨わんとす。志の奪うべからずして、所天容許す。便ち五冠山に投じて剃髮す。仍ち俗離山に適（ゆき）き、具足戒を受く。行同して草を結び、心此に鵝を護る。公岳に遊ぶに因り、忽ち神人の邀請するに遇い、化して宮闕を成すること兜率天の若し。說法、縁に応じて、倏焉として殄滅す。若し徳の行円に至るにあらずんば、孰か能く感を致すこと此の如くならんや。

②洎乎大中十二年、私發誓願。擬遊上國、隨入朝使利涉雲浜、乘一隻之船、過万重之浪、曾無懼念、不動安禪。逕到仰山慧寂和尚處、虔誠礼足、願為弟子。和尚寬爾笑曰、來何遲、緣何晚。既有所志、任汝住留。禪師不離左右、諮詢玄宗。若顏回於夫子之下、如迦葉於釈尊之前。彼中禪侶、皆增歎伏。

留ることを任す。禪師左右を離れず、玄宗を諮詢す。顔回の夫子の下にあるが若く、迦葉の釈尊の前にあるが如し。彼中の禪侶は、皆な歎伏を増す。

(3) 乾符初、松岳郡女檀越元昌王后、及子威武大王、施五冠山龍巖寺。便往居焉。今改瑞雲寺也。

(V一一一三一一四)

① 師有時表相現法、示徒証理遲疾。此中四對八相。

② ○、此相者、所依涅槃相、亦名理仏性相。与群生衆聖、皆依此相。相雖不異、迷悟不同。故有凡夫有聖。謂識此相者、名為聖人。迷此相者、名為凡流。是故、龍樹在南印土、則為說法、對諸大衆而現異相、身如月輪、當於坐上。唯聞說法、不見其形。彼衆之中、有一長者、名曰提婆。謂諸衆曰、識此瑞不。衆曰、非其長聖、誰能弁耶。余時提婆心根宿靜、亦見相默然契合。乃告衆曰、今此瑞者、師現仏性、非師身者、無相三昧。形如滿月、仏性之義。語猶未訖、師現本身座上、偈曰、身現円月相、以表諸仏体。說法無其形、用弁非聲色。若有人將此月輪相來問、相中心着牛字對也。

## (2) 四對八相

師、有る時、相を表わして法を現じて、徒に証理の遲疾を示す。此中に四對八相あり。<sup>(10)</sup>

「○、此の相は、所依涅槃相（涅槃を所依とする相）にして、亦た理仏性相と名づく。群生と衆聖と、皆な此の相に依る。相は異らずと雖も、迷悟は同じからず。故に凡夫有り、聖有り。謂く、此の相を識る者は、名づけて聖人と為す。此の相を迷う者は、名づけて凡流と為す。是の故に龍樹<sup>(11)</sup>は南印土に在りて、則ち為に說法し、諸の大衆に対して異相を現わし、身は月輪の如く、坐上に當る。唯だ說法を聞くのみにして、其の形を見ず。彼の衆の中に、一長者有り、名づけて提婆と曰う。諸衆に謂いて曰く、『此の瑞を識るや』と。衆曰く、『其の長聖にあらずば、誰か能く弁せんや』と。余時、提婆の心根宿靜にして、亦た相を見て、黙然として契合す。

乃ち衆に告げて曰く、『今、此の瑞は、師、仏性を現わす。師の身なきは、無相三昧なり。形は満月の如きは、仏性の義なり』と。語猶お未だ訖らざるに、師、本身を座上に現わして、偈に曰く、『身は円月の相を現わすは、以て諸仏の体を表わす。説法して其の形無きは、弁を用うるは声色にあらず』と。若し人有りて此の月輪の相を将ち來たりて問わば、相の中心に牛の字を着けて對うるなり』。

③④、此相者、牛食忍草相、亦名見性成仏相。何以故。經云、雪山有草、名為忍辱。牛若食者、則出醍醐。又云、衆生若能聽受諸啓大涅槃、則見仏性故。當知草喻妙法、牛喻頓機、醍醐喻仏。如是則牛若食草、則出醍醐。人若解法、則成正覺。故云、牛食忍草相、亦名見性成仏相也。

④○犇、此相者、三乘求空相。何以故。三乘人聞説真空、有心趣向、未証入真空。故表円相下画三牛也。若將此相來問、以漸次見性成仏相對之。

「○犇、此の相は、三乗求空相（三乗の空を求むる相）なり。何を以て故に。三乗の人は、真空を説くを聞いて、有心をもて趣向して、未だ真空に証入せず。故に円相の下に三牛を画きて表わすなり。若し此の相を將ち來たりて問わば、漸次の見性成仏相を以て之に對う」。

(5) 申、此相者、露地白牛相。謂露地者佛地、亦名第一義空。白牛者、諸法身之妙慧也。是故表一牛入円相也。問、何故月輪相下着三獸、又月輪相中心着牛字、對之耶。答、月輪相下三獸、是表三乘。月輪相中心一牛、是表一乘。是故挙權乘來、現實入証対之。問、向前已說、月輪相中心着牛、是牛食忍草相。何故又言、月輪相中心着牛者、露地白牛相也。両処皆是同相同牛。何故說文不同耶。答、說文雖別、相及牛則不異。問、若也不異、何故兩處各現同相同牛耶。答、雖相及牛則不異、見性遲疾不同。故兩處各現同相同牛。問、若論見性遲疾各別者、食忍草牛、與露地白牛、誰遲誰疾耶。答、食忍草牛、則明花嚴會中、頓見實性之牛。故疾。露地白牛、則明法華會中、<sup>(13)</sup>会三歸一牛。故(遲)。是故說文、雖則不同、証理不異。故挙同相同牛、明理智不異。不言來處全同也。

「申、此の相は、露地白牛相なり。謂く、露地とは、仏地といい、亦た第一義空と名づく。白牛とは、法身の妙慧を諸々なり。是の故に一牛の円相に入るを表わすなり」。問う、「何が故に月輪相の下に三獸を着け、又た月輪相の中心に牛の字を着けて之に對うや」。答う、「月輪相の下の三獸は是れ三乗を表わし、月輪相の中心の一牛は是れ一乗を表わすなり。是の故に權乘を挙げ來たつて、實を現わし証に入らしめて之に對う」。問う、「<sup>(さき)</sup>向前に已に月輪相の中心に牛を着くるは露地白牛相と言うや。両處は皆な是れ同じ相にして同じ牛なり。何が故に說文は同じからざるや」。答う、「說文は別と雖も、相と及び牛とは、則ち異ならず」。問う、「若<sup>も</sup>し異ならざれば、何が故に両處に各おのの同じ相にして同じ牛を現わすや」。答う、「相と及び牛とは則ち異ならずと雖も、見性の遲疾は同じからず。故に両處に各おのの同じ相にして同じ牛を現わす」。問う、「若し見性の遲疾は各おのの別なることを論ぜば、忍草を食う牛と露路の白牛とは、誰が遅く、誰が疾<sup>はや</sup>きや」。答う、「忍草を食う牛は、則ち花嚴會中の頓に實性を見る牛を明かす。故に疾し。露路の白牛は、則ち法華會中の会三歸一の牛を明かす。故に遅し。是の故に說文は、同じからずと雖<sup>いえど</sup>則も、証理は異ならず。故に同じ相にして同じ牛を挙げて、理智は異ならざるを明かす。來處を言わざれば全く

同じなり」。

⑥牛○、此相者、契果修因相。何以故。初發心住、雖成正覺、而不碍衆行。慧等佛地、行不過位。故表此相也。古人云、履踐如來所行之跡、則此相也。若有人將此相來問、又作月輪相、中心着卍字、對之。

⑦㊭、此相者、因円果滿相也。問、何故月輪相上頭、着牛字來、月輪相中心着卍字、對之。答、月輪相上頭着牛者、契果修因相。月輪相中心着卍字者、因円果滿相。拳因來現果、對之。

「㊭、此の相は、因円果滿相（因も円か果も満つる相）なり」。問う、「何が故に月輪相の上頭に牛の字を着け來たりしに、月輪相の中心に卍の字を着けて之に對うや」。答う、「月輪相の上頭に牛を着けるは、契果修因相なり。月輪相の中心に卍の字を着けるは、因円果滿相なり。因を挙げ來たつて果を現わして之に對う」。

⑧〇牛、此相者、求空精行相。謂、門前草庵菩薩求空故。經云、三僧祇修菩薩行、難忍能忍、難行能行、求心不歇。故表此相也。若有人將此相來問、月輪相中心着王字、對之。

「〇牛、此の相は、求空精行相（空を求めて行を精にする相）なり。謂く、門前の草庵の菩薩は空を求むる故に。經に云く、『三僧祇に菩薩行を修するは、忍び難きを能く忍び、行じ難きを能く行じて、心を求むること歇まず』と。故に此の相を表わすなり。若し人有りて此の相を持ち來たりて問わば、月輪相の中心に王の字を着けて之に對う」。

⑨㊯、此相者、漸証實際相。何以故。若有菩薩經劫修行、壞

四魔賊、始得無漏真智、証入佛地、更無余習所、恒似聖王降伏群賊、國界安寧、更無怨賊所怛。故表此相也。

(V一一一四一一八)

何を以ての故に。若し菩薩有りて劫修行を経て、四魔賊を壞さば、始めて無漏の真智を得、仏地に証入して、更に余習の所無きは、恒に聖王の群賊を降伏し、國界安寧にして、更に怨賊のおち怛る所無きに似たり。故に此の相を表わすなり」。

### (3) 兩對四相

①此下兩對四相、遣虛指實。

②牛ノ、此相者、想解遣教相。謂、若有人依仏所說一乘普法、善能討尋、善能解脱、實不錯謬、而不了自己理智、全依他人所說。故表此相也。若有人將此相來問、則祛上頭牛字、對之。

「牛ノ、此の相は、想解遣教相（想解の教を遣る相）なり。謂く、若し人有りて、仏の所說の一乘普法に依りて、善能く討尋し、善能く解脱し、實に錯謬せざるも、自己の理智を了さとらざれば、全く他人の所說に依る。故に此の相を表わすなり。若し人有りて此の相を將ち來たりて問わば、則ち上頭の牛の字を祛はらつて之に對う。」

③ノ、此の相は、識本還源相（本を識り源に還る相）なり。経<sup>16</sup>「ノ、此の相は、識本還源相（本を識り源に還る相）なり。經に『神を迴して空の窟に住して、難き調伏を降伏し、魔の所縛を解脱す。超然として露地に坐せば、識陰の般涅槃なり』と云うは、即ち此の相なり」。問う、「何が故に上頭の牛の字を祛つて、円相の中心の人の字を祛わざるや」。答う、「円相の中心の人の字は、理智を表わす。上頭の牛の字は、人の想解に喻う。若し人有りて教に依つて三藏の教典を分析病、而不除法。問、何故不許凡人依教学法耶。答、若是智者

依教、何用識心。凡人依教無益。問、諸仏所說三藏經典、有所用不。答、不是不許。依教悟入、依教想解、祇是虛妄。是故仏告阿難、雖復憶持、十方如來十二部經、清淨妙理如恒河沙、只益戲論。當知依教想解無益。問、何故教云、聞〔根カ〕仏教者、盡成聖果。又云、一毫之善、發跡駐仏。答、約上恨人、依教便悟。直現理智、決定明了。若約下根、依教不悟。想解無益。此下根人、依教勲種。待後世者、誰言無益。聞仏教者、盡成聖果。一毫之善、發跡駐仏。何況廣學經論、及講說者。

すると雖も、未だ自己の理智を顯わさざれば、全く是れ想解なり。想解生ぜざれば、則ち理智現前す。故に上頭の牛の字を祛い、円相の中心の人の字を祛わざるなり。是の故に經に云く、『但だ其の病を除いて法を除かず』と。問う、「何が故に凡人の教に依つて法を学ぶを許さざるや」。答う、「若是し智者の教に依るならば、何ぞ識心を用いん。凡人は教に依つて益無し」。問う、「諸仏の所說と三藏の經典とは、用うる所有りや」。答う、「是れ許さざるにあらず。教に依つて悟入し、教に依つて想解するは、祇たゞ是れ虛妄なり。是の故に、仏、阿難に告ぐ、「復た憶持すと雖も、十方如來十二部經、清淨妙理の恒河沙の如きは、只だ戯論を益すのみ」と。當に知るべし、教に依つて想解するは益無きことを」。問う、「何が故に教に『仏の教えを聞く者は、尽く聖果〔聖果〕を成す』と云うや。又た『一毫の善は跡を發して仏を駐む』と云うや」。答う、「上根の人に約さば、教に依つて便ち悟る。直に理智を現すれば、決定して明了になり。若し下根に約さば、教に依つて悟らず。想解は益無し。此の下根の人は、教に依つて種を勲す。後世を待つ者は、誰か益無きと言わん。仏の教えを聞く者は、尽く聖果を成す。一毫の善は、跡を發して仏を駐む。何ぞ況んや廣く經論及び講説を学ぶ者をや」。

④①牛、此相者、迷頭認影相。何以故。若有人不了自己仏及

淨土、信知他方仏淨土、一心專求往生淨土、見仏聞法。故勤修善行、念仏名号、及淨土名相。故表此相也。志公笑云、不解即心即仏、真似騎驢覓驢者、即此相也。若有人將此相來問、則祛円相下牛字、對之。

⑤人、此相者、背影認頭相。問、何故祛下頭牛字、不祛円相中心人字耶。答、衆生未發真智、未達真空故。專求他方淨土及仏、往生淨土、見仏聞法。衆生若迴光發智、達得真空、自己仏及淨土、一時齊現、不求心外淨土仏。故不祛円相中心人字、祛下牛字也。問、如何是自己仏、及自己淨土。答、衆生若發真智、達得真空、即真智是仏、空是淨土。若能如是體會、何處更求他方淨土及仏也。是故經云、將聞持仏仏。何不自聞聞。

「人、此の相は、背影認頭相（影に背きて頭を認むる相）なり。何を以ての故に。若し人有りて、自己の仏及び淨土を了<sup>きと</sup>らざれば、他方の仏と淨土を信知し、一心に専ら淨土に往生すること求めて、見仏聞法す。故に善行を勤修し、仏の名号及び淨土の名相を念ぜんとす。故に此の相を表わすなり。志公笑<sup>(19)</sup>いて云く、『即心即仏を解せざるは、真に驢に騎りて驢を覓むる者に似たり』と、即ち此の相なり。若し人有りて此の相を持ち来たりて問わば、則ち円相の下の牛の字を祛いて之に對う』。

「人、此の相は、背影認頭相（影に背きて頭を認むる相）なり。問う、「何が故に下頭の牛の字を祛いて、円相の中心の人の字を祛わざるや」。答う、「衆生未だ真智を發せず、未だ真空に達せざるが故に。専ら他方の淨土及び仏を求めて、淨土に往生し、見仏聞法せんとす。衆生若し光を迴らして智を發して真空に達得せば、自己の仏及び淨土は一時に齊現し、心外の淨土と仏を求めず。故に円相の中心の人の字を祛わずして、下の牛の字を祛うなり」。問う、「如何なるか是れ自己の仏及び自己の淨土」。答う、「衆生若し真智を發し、真空に達得せば、即ち真智是れ仏にして、空是れ淨土なり。若し能く是の如く体会せば、何の處に更に他方の淨土及び仏を求めるや。是の故に經<sup>(20)</sup>に云く、『將に仏仏に聞持して、何ぞ自に聞聞せざるや』と」。

(4) 四対五相

①又此下対五相。

②<sup>(一)</sup>、此相者、拳函索蓋相、亦名半月待円相。若有人將此相來問、更添半月、対之。此則問者拳函索蓋、答者將蓋着函。函蓋相稱故、已現円月相也。円相則表諸仏體也。

③○、此相者、把玉覓契相。若有人將此相來問、円月中心着某、対之。此則問者把玉覓契故、答者識珠便下手。

④○、此相者、釣入索続相。若有人將此相來問、某字辺添着人字、対之。此則問者釣入索續故、答續成寶器也。

⑤<sup>(二)</sup>、此相者、已成寶器相。若有人將此相來問、又作円月相中心着土字、対之。

⑥<sup>(三)</sup>、此相者、玄印旨相。迥然超前現衆相、更不屬教意所攝。若有人似个對面付、果然不見。故三祖云、毫釐有錯、天

又た此の下は、四対五相なり。

「<sup>(一)</sup>、此の相は、拳函索蓋相（函を挙げて蓋を索むる相）にして、亦た半月待円相（半月の円を待つ相）なり。若し人有りて此の相を將ち来たりて問はば、更に半月を添えて之に対えん。此は則ち問者は、函を挙げて蓋を索め、答者は、蓋を將つて函に着く。函蓋相い称うが故に、已に円月相を現わすなり。円相は則ち諸仏の体を表わすなり」。

「○、此の相は、把玉覓契相（玉を把つて契を覓むる相）なり。若し人有りて此の相を將ち来たりて問わば、円月の中心に某を着けて之に対えん。此は則ち問者は玉を把つて契を覓むが故に、答者は珠を識つて便ち手を下すなり」。

「<sup>(二)</sup>、此の相は、釣入索続相（釣入して続を索むる相）なり。若し人有りて此の相を將ち来たりて問わば、某の字の辺に人の字を添着して之に対えん。此は則ち問者は釣入して続を索むが故に、答えるものは続いで宝器を成すものなり」。

「<sup>(三)</sup>、此の相は、已成寶器相（已に宝器と成る相）なり。若し人有りて此の相を將ち来たりて問わば、又た円月相を作して中心に土の字を着けて之に対えん」。

「<sup>(三)</sup>、此の相は、玄印旨相（玄く旨を印す相）なり。迥然

地玄隔。然不無玄会之、誰能識此相也。若是其人、見而諳会、如子期聽<sup>(自か)</sup>百牙之琴、提婆見龍樹之相。不是其人、對面不識、似巴人聞白雪之歌、鷲子入淨名之會。假使後學根機玄利、將是則頓曉、如鶏把卵、啐啄同時。相性遲鈍者、學而難曉、似盲人相色、而轉錯耳。

(V—一二〇~一二三)

若し人有りて個の対面の付に似たらば、果然として見えず。故に三祖<sup>(21)</sup>云く、「毫釐も錯有れば、天地玄隔す」と。然れば玄無くて之を会せず。誰か能く此の相を識らん。若是し其人ならば、見えて諳<sup>(さら)</sup>で会すこと、子期の白牙の琴を聴き、提婆の龍樹の相を見るが如し。是れ其の人にあらずば、対面して識らざること、巴人の白雪の歌を聞き、鷲子の淨名の會に入るに似たり。假使し後學の根機玄利ならば、将に是れ則ち頓に曉むべきこと、鶏の卵を把つて啐啄同時なるが如し。相性の遲鈍の者は、学びて曉め難きこと、盲人の色を相て<sup>うた</sup>転た<sup>あやま</sup>錯るに似たるのみ」。

### (5) 三遍成仏

①師有時說三遍成仏篇。於中有三意。云何為三。一者証理成仏、二者行滿成仏、三者示顯成仏。

師有る時、三遍成仏篇を説く。「中に於て三意有り。云何が三と為す。一は証理成仏、二は行滿成仏、三は示顯成仏なり。

②言証理成仏者、知識言下、迴光返照、自己心原、本無一物、便是成仏。不從万行漸漸而証。故云証理成仏。是故經云、初發心時、便成正覺、又古人云、仏道不遠、迴心即是、即此義也。此証理成仏中、若説体性、都無一物、通論三身、不無一仏二菩薩、雖有三人、而今見性成仏。故得成仏、功在文殊。古人云、文殊是諸仏母。所謂諸仏從文殊生故。言文殊

者、即実智也。一切諸仏、因其実智、而証菩提。是故、文殊是諸仏母耳。

物も無く、通じて三身を論ぜば、一仏二菩薩は無きにあらず、三人有りと雖も、而今の見性成仏なり。故に成仏を得るは、功は文殊に在り。故に古人云く、『文殊は是れ諸仏の母なり。所謂る諸仏は文殊より生ずるが故に。文殊と言うは、即ち実智なり。一切の諸仏は、其の実智に因りて菩提を証するなり。是の故に文殊は是れ諸仏の母なるのみ。』

③言行満成仏者、雖已窮其真理、而順普賢行願、歷位廣修菩薩之道。所行周備、悲智円満。故云、行満成仏也。故古人云、行到處即是從來處。是故明知、所行已周、還至本處。本處者、即理也。此行満成仏、所証之理、不異於前証理成仏之理。理雖不異、行因至果。故云、行満成仏也。此行満成仏中、若拳果德、但以普賢、行成仏道、論三身、亦有一仏二菩薩、雖有三人、而今別取行満成仏。故得成仏、功在普賢。故古人云、普賢是諸仏父也。所謂諸仏從普賢生故。言普賢者、即万行也。一切諸仏、因其万行、而証菩提。是故、普賢是諸仏父耳。

行満成仏と言うは、已に其の真理を窮むと雖も、普賢の行願に順つて、位を歴て広く菩薩の道を修す。所行周く備り、悲智円満す。故に行満成仏と云うなり。故に古人云く、『行の到る處は即ち是れ從來の處なり』と。是の故に明らかに知りぬ、所行已に周く、還つて本處に至ることを。本處とは即ち理なり。此の行満成仏の所証の理は、前の証理成仏の理と異ならず。理は異ならずと雖も、因を行じて果に至る。故に行満成仏と云うなり。此の行満成仏の中に、若し果徳を挙ぐれば、但だ普賢のみを以つて、行じて仏道を成し、三身を論ぜば、亦た一仏二菩薩有り、三人有りと雖も、而今別に行満成仏を取る。故に成仏を得るに、功は普賢に在り。故に古人云く、『普賢は是れ諸仏の父なり』と。所謂る諸仏は普賢より生ずるが故に。普賢と言うは、即ち万行なり。一切の諸仏は、其の万行に因りて菩提を証す。是の故に普賢は是れ諸仏の父なるのみ。

④言一仏二菩薩者、遮那是理、文殊是智、普賢是行。此理智行、三人同体故、一不可捨也。又一仏二菩薩、互為主伴、以本体無上、遮那為主、以見性智功、文殊為主、以万行福力、普賢為主。是故李玄(通玄カ)云、一切諸仏、皆以文殊普賢二大士、成仏菩提也。又云、文殊普賢、為諸仏作少男長子。故知、三人互為主伴耳。

⑤言示顯成仏者、如前証理行滿、自行成仏已畢、今為衆生、示顯成仏、八相成道矣。言八相者、從兜率天退、入胎、住胎、出胎、出家、成道、轉法輪、入涅槃等、八相成仏。故云、示顯成仏。當知、八相成道、是報化非真。是故經云、如來不出世、亦無有涅槃、以本願力故、示顯自在法。此經、報化仏中指真仏也。又經云、吾從成仏已來、經無量阿僧祇劫。故知、釈迦如來、無量劫前、已成行滿大覺、而為衆生故、示顯始成正覺。今此釈迦、是賢劫千仏中第四仏也。過去莊嚴劫中一千仏、現在賢劫中一千仏、未來星宿劫中一千仏。如是三劫中、一切諸仏出現於世、攝化群生、相傳授記、分毫不錯矣。歎看教典、推尋古跡、通觀一人成仏方様、應知三遍成仏耳。伏請欲磨仏位者、略看筌蹄、却自思惟、前仏後仏、皆同此路、如人行路、新旧同轍。故記而之也。

一仏二菩薩と言うは、遮那是理、文殊は是れ智、普賢は是れ行なり。此の理と智と行は、三人同体なるが故に、一も捨つべからざるなり。又た一仏二菩薩は、互いに主伴と為り、本体無上を以て遮那を主と為し、見性智功を以て文殊を主と為し、万行福力を以つて普賢を主と為す。是の故に李通玄(27)云く、『一切諸仏は皆な文殊と普賢の二大士を以て、仏の菩提を成すなり』と。又た云く、『文殊と普賢とは、諸仏の為に少男と長子と作る』と。故に知りぬ、三人は互いに主伴と為るのみと。

示顯成仏と言うは、前の証理と行満の如く、自行し成仏し已畢(おわ)つて、今、衆生の為に、示顯成仏し、八相成道す。八相と言ふは、兜率天より退き・入胎・住胎・出胎・出家・成道・轉法輪・入涅槃す等の八相の成仏なり。故に示顯成仏と云う。當に知るべし、八相成道は是れ報化は真にあらざることを。是の故に經に云く、『如來は出世せず、亦た涅槃有ること無し、本願力を以ての故に、自在法を示顯す』と。此の經は報化仏の中に真仏を指すなり。又た經に云く、『吾れ成仏より已來(28)た無量阿僧祇劫を経たり』と。故に知りぬ、釈迦如來は、無量劫の前に、已に行満大覺を成じて衆生の為にするが故に、始めて正覺を成ずることを示顯す。今、此の釈迦は是れ賢劫千仏中の第四仏なり。過去莊嚴劫中の一千仏、現在賢劫中の一千仏、未來星宿劫中の一千仏あり。是の如きの

(V一一二二一~一一五)

### (6) 三篇証實際

①師有時說三篇。於中有三意。第一頓証實際篇、第二迴漸証實際篇、第三漸証實際篇。

②廣野中有一仙人、名曰該通。為大衆說、若有衆生、無始已來、不悟性地、輪迴三界、隨緣受報、忽遇智者、演說真教、頓悟性地、便成正覺、不依漸次。故名為頓証實際。是故經云、雪山有草、名曰忍辱。牛若食者、即出醍醐、是其意也。衆中有一隱士、名曰智通。啓仙人曰、信知、群品自有性地。又一切智者、演說真教、不為一人。何以故、同聞真教、悟與不悟、各各不同。仙人告隱士言、衆生雖有自性清淨圓明之體、背本逐末、多劫多時、受別異身、根性利鈍不等。故同聞真教、悟與不悟、各各不同。不是智者說真教禍。故經云、猶如明淨日、瞽者莫能見。無有智慧心、終不能見。隱士啓仙人

師有時、三篇を説く。「中に於て三意有り。第一は頓証實際篇、第二は迴漸証實際篇、第三は漸証實際篇なり。」

廣野中に一の仙人有り、名づけて該通と曰う。大衆の為に説く、「若し衆生有りて、無始より已來た、性地を悟らず、三界を輪迴し、縁に随つて報を受くることありて、忽ち智者の真教を演説せんに遇わば、頓に性地を悟りて便ち正覺を成ずること漸次に依らざるなり。故に名づけて頓証實際と為す。是の故に經に、雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛若し食わば、即ち醍醐を出だす、と云うは、是れ其の意なり」と。衆中に一の隱士有り。名づけて智通と曰う。仙人に啓して曰く、「信に知る、群品は自ら性地有ることを。又た一切の智者は、真教を演説すること一人の為にせざること

三劫中に、一切の諸仏は、世に出現し、群生を攝化し、相伝授記すること、分毫も錯らず。教典を歎看し、古跡を推尋し、一人の成仏の方様を通觀するに、應に三遍成仏を知るべし。伏して請うらくは、仏位を磨がんと欲う者は、略して筌蹄を見て、却に自ら前仏も後仏も、皆な此の路を同じくすることを思惟し、人の行路の如く、新旧同轍ならんことを。故に記して之<sup>のこ</sup>すなり」。

曰、諦觀高指、且尋來言、智者說法、不為一人。悟与不悟、唯在愚智。然則愚智本來、各各不同。說法有何所用。仙人告隱士言、汝今諦聽。吾為汝說。智人不是本悟。愚人不是長迷。愚人忽悟真說、智人不是外來。若也不用真教、愚爭成智人。若也不用真教、何處弁得利鈍。是故、衆生若是根鈍者、再聞真教、不曉性地。衆生若是利根者、忽聞真教、頓曉性地、便是智人也。何處愚智有隔。是故當知、凡聖不隔、根有利鈍。智者說法、亦不為一人。猶如母鶏抱卵、衆卵皆發、贊窠不發。可即母鶏唯不愛衆卵、愛贊窠。是則發與不發、唯在卵性、不是母鶏抱卵之禍。一切智者、亦復如是。廣為大眾、演說真教。根利者頓曉、根鈍者不曉、可則智者唯愛利根、不愛鈍根。是即曉與不曉、唯在根性、不是智者說教之禍。是故經云、所有聞法、不由他悟。然即知、假方便。智者常說妙法、悟与不悟、此在學人、不在智者。隱士問曰、衆生若是利根、忽聞真教、言下慧發、頓悟性地。此是何人。仙人答曰、此是智照文殊。隱士問曰、文殊智照在何處。仙人答曰、文殊智照是在性之(地力)。隱士問曰、(會照力)照智与性地、同異若何。仙人答曰、智照與性地、不同不異。隱士問曰、智照与性地、不同不異、其義如何。仙人答曰、智照是能証之人、性地是所証之法。故不無能所。是故古人云、以此無知之般若、証彼無相之真諦。故智与性不同。又能証智照無知、所証性地無體。不有能所。

を。何を以ての故に、同じく真教を聞いて、悟ると悟らざると、各各同じからざるや(31)と。仙人は隱士に告げて言く、『衆生は自性清淨円明の体有りと雖も、本に背いて末を逐(お)い、多劫多時において、別の異身を受け、根性の利鈍等しからざるなり。故に同じく真教を聞いて、悟ると悟らざると、各各同じからざるなり。是れ智者の真教を説く禍いならず。故に經(32)に云く、猶お明淨の日の如くなるも、瞽者は能く見ること莫し。智慧の心有ること無ければ、終に見ること能わず、と』と。隱士、仙人に啓して曰く、『高指を諦觀し、且つ來言を尋ねば、智者の說法は、一人の為にせず。悟ると悟らざるとは、唯だ愚と智とにのみ在り。然則ば愚と智とは本来にして各各同じからず。說法は何の用いる所有らんや』と。仙人、隱士に告げて言く、『汝今、諦聽せよ。吾れ汝の為に説かん。智人は是れ本より悟るにあらず。愚人は是れ長く迷えるにあらず。愚人は忽ち真說を悟らば、智人にして是れ外より來たるにあらず。若もし真教を用いざれば、愚は争か智人に成らん。若也し真教を用いざれば、何の處にか利鈍を弁得せん。是の故に衆生若是し根鈍なれば、再び真教を聞きて、性地を曉らめず。衆生若是し利根なれば、忽ち真教を聞きて、頓に性地を曉らむ、便ち是れ智人なり。何の處に愚とも、性地を曉らめず。衆生若是し利根なれば、忽ち真教を聞きて、頓に性地を曉らむ、便ち是れ智人なり。何の處に愚とも、性地を隔つこと有らん。是の故に當に知るべし、凡と聖とを智とを隔(お)つこと有らん。是の故に當に知るべし、凡と聖とを

是故古人云、智窮真際、能所両亡。故智照与性地不異照。隱士智通、聞仙人説、奉契高指、頓決疑網也。

隱

隔てず、根に利鈍有り。智者の説法も、亦た一人の為にせず。猶お母鶏の卵を抱いて、衆卵の皆な発して、贊窯の発せざるが如し。可ぞ即ち母鶏は唯だ衆卵のみを愛して贊窯を愛せざらんや。是れ則ち発と不発とは、唯だ卵性にのみ在りて、是れ母鶏の卵を抱くの禍いにあらず。一切の智者も亦復た是の如し。広く大衆の為に、真教を演説す。根利なる者は頓に曉らめ、根鈍なる者は曉らめず。可ぞ則ち智者は唯だ利根のみを愛して鈍根を愛せざらんや。是れ即ち曉ると曉らざるとは、唯だ根性にのみ在りて、是れ智者の説教の禍いにあらず。是の故に經に云く、<sup>(32)</sup> 所有る聞法は、他に由りて悟らず、と。然れば即ち知りぬ、方便を仮ることを。智者は常に妙法を説くに、悟ると悟らざるとは、此れ學人に在りて、智者に在ざるなり」と。隱士問うて曰く、「衆生若是し利根なれば、忽ち真教を聞いて、言下に慧發し、頓に性地を悟る。此れは是れ何人ぞ」と。仙人答えて曰く、「此れは是れ智照の文殊なり」と。隱士問うて曰く、「文殊の智照は、何の処に在りや」と。仙人答えて曰く、「文殊の智照は、是れ性地に在り」と。隱士問うて曰く、「智照と性地とは、同異は若ん何」と。仙人答えて曰く、「智照と性地とは、同にあらず異にあらず」と。隱士問うて曰く、「智照と性地とは、同にあらず異にあらずとは、其の義は如何」と。仙人答えて曰く、

『智照は是れ能証の人にして、性地は是れ所証の法なり。故に能所は無きにあらず。是の故に古人云く、此の無知の般若を以て彼の無相の真諦を証す、と。故に智と性とは同じからず。又た能証の智照は無知にして、所証の性地は無体なり。能所は有るにあらず。是の故に古人云く<sup>(34)</sup>、智、眞際を窮めば、能所<sup>ふたつ</sup>ながら亡ず、と。故に智照と性地とは照を異にせざるなり』と。隱士智通は仙人の説くを聞いて、高指に奉契し、頓に疑網を決するなり。

③于時該通仙人、為大衆說。先為智通已說見性。若論衆行、不必如此。此衆中有遊子、名曰行通。啓仙人曰、見性如此。

衆行若何。仙人告遊子言、若有衆生、忽聞真教、頓見性地、不住此處、隨緣行自利利他悲智。故名為衆行。遊子啓仙人曰、我等曾聞仙人演說法、忽聞真教、頓悟性地、名為智照文殊。今承仙人說、頓悟性地、不住此處、隨緣行自利利他悲智。故名為衆行。行此行者、此是何人。仙人答曰、行此行者、寄位普賢。遊子問曰、普賢大士、寄何等位。仙人答言、寄因五位、乃至果位。雖寄此位、不住此位。衆行行時、三等普賢。遊子問曰、寄位於因位、乃至果位、何等名為三等普賢。仙人答曰、一者出纏普賢、二者入纏普賢、三者果後普賢。遊子問曰、此三普賢、勝劣等級、其義如何。仙人答言、此三普賢、勝劣等級、其義不同。

時に該通仙人は大衆の為に説く。先に智通の為に已に見性を説けり。若し衆行を論ずれば、必ずしも此の如くならず。此の衆の中に遊子有りて、名づけて行通と曰う。仙人に啓して曰く、『見性は此の如し。衆行は若何』と。仙人、遊子に告げて言く、『若し衆生有りて、忽ち真教を聞き、頓に性地を見ば、此の處に住せずして、縁に隨いて自利利他の悲智を行ずるなり。故に名づけて衆行と為す』と。遊子、仙人に啓して曰く、『我等曾て仙人の法を演説するを聞きしに、忽ち真教を聞き、頓に性地を悟らば、名づけて智照の文殊と為す、と。今、仙人の説を承<sup>うけたまわ</sup>るに、頓に性地を悟らば、此の處には住せずして、縁に隨いて自利利他の悲智を行ずるなり。故に名づけて衆行と為す、と。此の行を行ずる者は、此れは是れ何人ぞや』と。仙人答えて曰く、『此の行を行ずる

者は、寄位の普賢なり』と。遊子問うて曰く、『普賢大士は、何等の位に寄るや』と。仙人答えて言く、『因の五位乃至果位に寄る。此の位に寄ると雖も、此の位に住せず。衆行行ずる時は、三等の普賢あり』と。遊子問うて曰く、『位を因位乃至果位に寄す。何等をか名づけて三等の普賢と為すや』と。仙人答えて曰く、『一は出纏の普賢、二は入纏の普賢、三は果後の普賢なり』と。遊子問うて曰く、『此の三普賢の勝劣等級は、其の義は如何』と。仙人答えて言く、『此の三普賢の勝劣等級は、其の義同じからず。

④謂、所言出纏普賢者、見性之後、行於衆行、對前万境、不無警起之心、已達心源、不滯幻化之境。故古人云、不無所斷之障、還有能斷之智。遊子問曰、古人云、若發能証之智、全無所斷之障、其義如何。仙人答曰、若發能証之智、全無所斷之障者、此是文殊斷惑。何以故。文殊當性之時、體中不有異相故。今言不無所斷之障、還有能斷之智、此是普賢斷惑。何以故。普賢歷位之時、不無斷惑成德故。是故、兩人斷惑成德不同。不會兩人斷惑成德、相諍斷惑成德之義。遊子問曰、已知文殊斷惑如此。若論普賢斷惑、斷現行耶、斷習氣耶。仙人答言、若言普賢位中、全無現行煩惱。普賢寄位斷惑、此是習氣煩惱。遊子問、現行与習氣如何。普賢全無現行之惑、唯有習氣之障。仙人答言、凡夫對境起心、不識前境、後境作業、

即是現行。智者対境起心、知境虛幻、不滯前境習氣。故是普賢。是見性之後、行行之人。故全無現行之惑、唯有習氣之障。若無習氣可斷、何用難忍能忍。若無悲智成仏、何用難行能行。雖行悲智、二門所作、依体成行。是故古人云、所作皆依性、修成功德林。終無取寂意、唯有濟群心。行悲悲廣大、用智智能深、利他兼自利。少聖詎能任。然即知、出纏普賢、衆行悲智、而依体修行。又細說普賢衆行。即行布円融齊現、斷惑成德俱有。自利利他双修、智門悲門並成。言行也、繁興大用。起必全真。言行相也、不無依位断惑、位高則習氣漸薄、行廣則悲智增深、從十住乃至十地、出纏菩提已滿也。

断惑成徳を会せんば、断惑成徳の義を相い諍わん』と。遊子問うて曰く、『已に文殊の断惑の此の如きを知れり。若し普賢の断惑を論ぜば、現行を断するや、習氣を断するや』と。仙人答えて言く、『若し普賢位中を言わば、全く現行の煩惱無し。普賢の寄位の断惑は、此れは是れ習氣の煩惱なり』と。遊子問う、『現行と習氣とは如何。普賢は全く現行の惑無く、唯だ習氣の障のみ有るや』と。仙人答えて曰く、『凡夫の境に對して心を起こし、前境を識らずして後境は業を作すは、即ち是れ現行なり。智者は境に對して心を起こし、境の虚幻を知りて前境の習氣に滯おらざるなり。故に是れ普賢なり。是れ見性の後に、行を行ずる人なり。故に全く現行の惑無くして、唯だ習氣の障のみ有り。若し習氣の断すべきこと無ければ、何を用つて忍び難きを能く忍ばん。若し悲智の成仏無ければ、何を用つて行じ難きを能く行せん。悲智を行ずと雖も、二門の所作は、体に依つて行を成す。是の故に古人云く、所作は皆な性に依つて、功德林を修成す。終に寂意を取ること無ければ、唯だ群を済うの心のみ有り。悲を行ずるに悲は広大なり。智を用うるに智は能く深し。他を利して兼て自利す。少聖詎たれか能く任せん、と。然れば即ち知りぬ、出纏の普賢は、衆く悲智を行じて体に依つて修行することを。又た細かに普賢の衆行を説かん。即ち行布円融すれ

ば齊しく現じ、断惑成徳すれば俱に有り。自利利他双修し、智門悲門並な成す。行を言わば、大用を繁興す。起らば必ず真を全うす。行相を言わば、位に依つて断惑は無きにあらず。位高ければ、則ち習氣漸く薄く、行広ければ、則ち悲智増ます深し。十住より乃至十地まで、出纏の菩提已に満つるなり。

⑤所言入纏普賢者、一切群品中、同類大悲是。前出纏普賢位中、広行悲智、而自利利他行故。不無断惑成徳之功、雖斷惑成徳之功、出纏已満、而不信出纏無患之処。故於四生六趣、広行大悲、同断化物、之名入纏普賢。以此入纏化物之徳、与前出纏成行之功、二心功齊平等故、名為等覺。悲智円満故、名為等覺。不出纏入纏、不取大智大悲故、名為妙覺。雖不出智慧出纏入纏、若論果徳、無行不取、無位不收也。

⑥所言果後普賢者、遍行三昧是也、謂、妙覺位中、雖不取出纏（入纏）大智大悲、而不住此、還向出纏入纏、大智大悲、逆順縱橫。於諸位中、同類同心、亦不定守位、隨緣任運、廣作大悲、於諸類中、何位定不受、於能作能受、不作不受故、

言う所の入纏の普賢とは、一切の群品中の同類の大悲是れなり。前の出纏の普賢の位中に、広く悲智を行じて自利し利他する行なるが故に。断惑成徳の功は無きにあらず、断惑成徳の功なりと雖も、出纏已に満ち、出纏無患の処を信ぜず。故に四生六趣において、広く大悲を行じ、同じく化物を断ず。之を入纏の普賢と名づく。此の入纏化物の徳と前の出纏成行の功とを以てするに、二心の功は齊しく平等なるが故に、名づけて等覺と為す。悲智円満するが故に、名づけて等覺と為す。出纏入纏を取らず、大智大悲を取らざるが故に、名づけて妙覺と為す。悲智出纏入纏を取らずと雖も、若し果徳を論ずれば、行の取らざる無く、位の收めざる無きなり。

言う所の果後の普賢とは、遍く三昧を行ずる、是れなり。謂く、妙覺位中に、出纏（入纏）大智大悲を取らずと雖も、此に住せず、還つて出纏入纏大智大悲に向かつて、逆順縱横す。諸位中に於て、同類同心にして亦た定んで位を守らず、

名為果後普賢也。若定取此人所行者、未会此人行處也。

縁に隨がい運に任せて、廣く大悲を作し、諸類中に於て、何の位も定んで受けず、能作能受に於ても、不作不受なりが故に、名づけて果後の普賢と為すなり。若し定んで此の人の所行を取らば、未だ此の人の行處を会せざるなり。

(7) 所言三等普賢者、不是三人。一人行行、依行勝劣大義、三等普賢也。所言一人者、初頓証實際之時即文殊、今隨縁行行之時即普賢、故名為一人也。此是通取內証外化也。若以內証外化、不同故、文殊普賢兩人。若以通取能証所証、及衆行不同、即為三人也。此大教意說也。謂、大經題云、大方広者、所說之法故、即遮那是也。仏者、能証之人也故、即文殊是也。花嚴者、隨縁之行故、普賢是也。此且一仏二菩薩、即為三人也。若欲修行普賢行者、先窮真理、隨縁行行。即今行与古跡相應。如似閉門造車、出門合轍耳。

言う所の三等の普賢とは、是れ三人にあらず。一人、行を行じて、行に依つて大義を勝劣する三等の普賢なり。言う所の一人とは、初め頓に實際を証するの時、即ち文殊なり。今ま縁に隨つて行を行ずるの時、即ち普賢なり。故に名づけて一人と為すなり。此は是れ内証外化を通取するなり。若し内証外化を以てせば、同じからざるが故に文殊と普賢は兩人なり。若し能証と所証と及び衆行とを通取するを以てせば、同じからざるなり。即ち三人と為すなり。此れ大教の意を説くなり。謂く、大經<sup>(38)</sup>に題して云く、大方広とは、所説の法なるが故に、即ち遮那是れなり。仏とは、能証の人なるが故に、即ち文殊是れなり。花嚴とは、隨縁の行なるが故に、普賢是れなり、と。此に且く一仏二菩薩は、即ち三人と為すなり。若し普賢行を修行せんと欲わば、先づ真理を窮め、縁に随つて行を行すべし。即今の行と古跡と相應すれば、門を閉じて車を造り、門を出して轍を合わせるが如似し』と。

(8) 回漸証實際篇第二。時該通仙人、為大衆説法。若有衆生、無始已來、不悟性地、輪迴三界、聞三乘漸教、悟三乘法、三

『若し衆生有りて、無始より已來た、性地を悟らず、三界に

界患故。有三乘人、此忽聞真教、迴成妙惠、窮証實際。故名為迴漸証實際也。是故、古人云、門前三駕車是權乘、露地白牛、方明實証、即其意也。隱士智通啓仙人曰、此迴漸証實際之者、與彼頓証實際之人、同異如何。仙人答曰、雖先已落三乘、不在三乘故、來処玄殊。而今迴漸証實際故、與彼頓証實際者不異。是故、古人云、百川歸大海、無百川名。三乘歸一乘、無三乘名也。然即知、此迴漸証實際之人、與彼頓証之人不異也。莫愁迴漸與頓証同異、自迴隨緣之心、還照實際之理也。隱士智通、奉領真說、寂然無言也。

⑨于時遊子行通、啓仙人曰、我等曾聞仙人演說。若有衆生、頓証悟性地、不住此處、隨緣行行、名為衆行。行此行者、名為普賢。今此迴漸証實之後、有人行衆行耶、無人行衆行耶。仙人答曰、不無行衆行者。所以者何。迴漸証實者、即露地白牛故。白牛運轉、不住露地故、不無行衆行人。所言露地白牛者、露地是所証之法故、即遮那是也。白牛是能証之人故、即

輪迴して、三乘の漸教を聞いて三乗の法を悟るは、三界の患いなるが故に。三乗の人有りて、此に忽ち真教を聞いて、妙惠を迴成し、實際を窮証す。故に名づけて迴漸証實際と為すなり。是の故に古人の、門前の三駕車は是れ權乘にして、露地の白牛は方に實証を明かす、と云うは、即ち其の意なり』と。隱士智通、仙人に啓して曰く、『此の迴漸証實際の者は、彼の頓証實際の人と、同異は如何』と。仙人答えて曰く、『先に已に三乗に落つと雖も、三乗に在らざるか故に、來処は玄に殊なる。而今漸を迴して實際を証するが故に、彼の頓に實際を証する者と異ならず。是の故に古人云く、百川の大海上に歸すれば、百川の名無し。三乗の一乗に歸すれば、三乗の名無し、と。然れば即ち知る、此の迴漸証實際の人と彼の頓証の人と異ならず。迴漸と頓証との同異を愁うること莫れ。自ら隨縁の心を迴して還って實際の理を照すなり』と。隱士智通は真說を奉領して、寂然として無言なり。

時に遊子行通、仙人に啓して曰く、『我等曾て仙人の演説を聞けり。若し衆生有りて、頓に性地を証悟せば、此の処に住せずして、縁に随つて行を行ずるなり、名づけて衆行と為す。此の行を行ずる者は、名づけて普賢と為す、と。今まで此の漸を迴して實を証するの後に、人の衆行を行ずること有りや、人の衆行を行ずること無きや』と。仙人答えて曰く、

是文殊是也。白牛運転、不住此處故、即普賢是也。普賢所行、即是衆行也。二篇大意如此。汝自諦觀、同異自看耳。

『衆行を行ずる者は無きにあらず。所以は何。漸を迴らして実を証する者は、即ち露地の白牛の故に。白牛は運転して露地に住せざるが故に、衆行を行ずる人は無きにあらず。言う所の露地の白牛とは、露地は是れ所証の法なるが故に、即ち遮那是れなり。白牛とは、是れ能証の人なるが故に、即ち是れ文殊是れなり。白牛運転して此の處に住せざるが故に、即ち普賢是れなり。普賢の行ずる所は、即ち是れ衆行なり。二篇の大意は此の如し。汝自ら諦觀し、同異自ら看るのみと。』

⑩漸証實際篇第三。時該通仙人、為大衆說。若有衆生、無始已來、不悟性地、輪迴三界、隨緣受報、忽聞漸教、信解漸發、寄因六位、經三祇劫、難忍能忍、難行能行、斷惑成德、始得無漏真智、露現法身、故名為漸証實際也。是故、古人云、信根生一念、諸仏盡應知、修因於此日、証果未來時。三大僧祇劫、六度久安施。薰成無漏種、方号不思議、是其意也。時隱士智通、啓仙人曰、今此漸証實際之人、頓悟實際之人、同異如何。仙人告隱士言、雖漸頓不同、而終歸一耳。所以者何。小川帰海、全同一味、漸解帰源、豈有兩般也。是故漸頓雖異、帰源無二耳。隱士智通奉仙人教、不生異解、退身默然也。

漸証實際篇第三。時に該通仙人、大衆の為に説く。『若し衆生有りて、無始より已來た、性地を悟らず、三界に輪迴し、縁に随つて報を受け、忽ち漸教を聞いて、信解漸く發し、因の六位に寄せて、三祇劫を経て、忍び難きを能く忍び、行じ難きを能く行じて、断惑成徳し、始めて無漏の真智を得て、法身を露現す。故に名づけて漸証實際と為すなり。是の故に古人の、信根に一念を生ずれば、諸仏尽く応に知るべし、因を此の日に於て修するは、果を未だ來らざる時証するなり。三大僧祇劫、六度久しく安施す。無漏の種を薰成して、方<sup>(41)</sup>めで不思議と号す、と云うは、是れ其の意なり』と。時に隱士智通、仙人に啓して曰く、『今ま此の漸証實際の人と頓悟實際の人と、同異は如何』と。仙人、隱士に告げて言

く、『漸頓同じからずと雖も、終に一に帰するのみ。所以は何。小川の海に帰すれば、全く一味に同じ。漸に源に帰するを解くすれば、豈に両般有らんや。是の故に漸頓は異ると雖も、源に帰れば二無し』と。隱士智通は、仙人の教えを奉けて、異解を生ぜず、身を退いて黙然たり。

⑪于時遊子行通、啓仙人曰、於前篇中、聞仙人説、頓証實際後、有行人。此篇所明、漸証實際之者。漸証實際已後、有行人耶。仙人答曰、雖不無行行、不同前篇所明者。頓証實際已後、隨位行時、出纏入纏、乃至果後、三等普賢行。今此漸証實際篇意者、依漸教方便、經三僧祇、修菩薩行、始得無漏真智。以此無漏真智、露現法身、故名為漸証實際。漸証實際已後、雖不無行行、而全依位等級故。是故、不同前篇所明也。遊子問曰、曾聞、前兩篇中、俱明能証之人、所証之法、乃至隨緣行人、各各有名。此篇中還有能証所証、及隨緣行人名耶。請為指出。仙人答曰、不無能証所証、及隨緣行人名也。謂、能証之人者、即是無漏真智、亦報身仏是也。所証之法者、即是實際、亦名法身仏是也。行之人即是無漏真智、不守果位、隨緣利物、名為行人、亦名化身仏是也。

時に遊子行通、仙人に啓して曰く、『前篇の中に於て仙人の説を聞くに、頓証實際の後に行人有り。此の篇の明かす所は、漸証實際の者なり。漸証實際已後に行人有りや』と。仙人答えて曰く、『行を行ずるは無きにあらずと雖も、前篇に明す所の者と同じからず。頓証實際の已後に、位に随つて行ずる時は、出纏入纏乃至果後の三等の普賢行あり。今ま此の漸証實際篇の意は、漸教の方便に依つて、三僧祇を経て、菩薩行を修し、始めて無漏の真智を得。此の無漏の真智を以て、法身を露現す。故に名づけて漸証實際と為す。漸証實際已後に、行を行ずるは無きにあらずと雖も、而も全く位に依つて等級あるが故に。是の故に前篇に明かす所と同じからざるなり』と。遊子問うて曰く、『曾て前の兩篇の中に聞くに、俱に能証の人と所証の法と乃至隨緣の行人の各各有ることを明かす。此の篇の中に還た能証と所証と及び隨緣の行人の名有りや。請う為に指出せよ』と。仙人答えて曰く、『能証と所証と及び隨緣の行人の名は無きにあらず。謂く、能証の

(V—一二五~一三七)

人は、即ち是れ無漏の真智なり、亦た報身仏是れなり。所証の法は、即ち是れ實際なり、亦た法身仏と名づく是れなり。之を行ずるの人は、即ち是れ無漏の真智にして果位を守らず、縁に隨いて物を利するは、名づけて行人と為すなり、亦た化身仏と名づく是れなり<sup>(42)</sup>。

(7) 還化・謚号

和尚享年六十五、還化也。謚号了悟禪師真原之塔。

(V—一三七) ——————す。

和尚、享年六十五にて還化す。了悟禪師真原の塔<sup>(43)</sup>と謚号

(つづく)

(一九八九・七・九)

付記 この論文は、平成元年度駒沢大学特別研究共同研究費の助成による代表田中良昭、研究課題「南宗禪の成立史的研究」の分担研究の成果報告の一部である。